

「獣医病理学用語集：日本獣医学会病理分科会編，1994」のできるまで

岡田 幸助 (岩手大)

旧約聖書にバベルの塔の話があり，人々は天までとどく塔を作ろうとした。初めは同じ言葉であったのでうまくいったが，神様は人々のうぬぼれを打ち砕くため言葉を通じなくした。するとたちまち混乱が起り，事業は失敗に終わってしまったという話である。われわれの学問も同じで，学会発表や論文作成時に同じ言葉で話すことは重要である。実際にはいちいち用語集をひもとくことはまれであるが，いざというときには必要である。1992年秋，当時の日本獣医学会病理学分科会長 後藤直彰先生の発案で，分科会の企画により日本中央競馬会の支援を得て，獣医病理学用語集が学窓社から発行されることになり，編集委員長をおおせつかったので，その経緯と感想を記してみたい。

さて，何も無い白紙の状態から辞書を作るのは想像しただけでも大変である。先発の用語集として解剖学分科会の「獣医組織学用語」があるが，あれは元になる用語集が既にあった。解剖学分科会会長の牧田登之先生（山口大）にわれわれの企画をお話すると，「そんなのいつまでたってもできないよ」と言われてしまった。しかし，まず病理学分科会の後藤先生，板倉先生，土井先生と相談しながら，百溪英一（家衛試，牛担当），成田寛（家衛試，豚担当），兼子樹広（競走馬総合研，馬担当），梅村孝司（鳥取大，犬担当），中山裕之（東大，猫担当），真板敬三（残農研，実験動物担当），布谷鉄夫（日生研，家禽担当）の各氏と筆者（総論担当）からなる編集委員会が結成され，1993年7月に第1回編集委員会がもたれた。

発行の目的を獣医病理学の教育のためと，用語を整理するためとし，まず，“Veterinary Pathology; Jones & Hunt 1992”と“Disease of Poultry; Hofstad et al. 1978”の索引を叩き台として，それを各編集委員に割り当て，英単語の日本語訳，読み方，コード表記をテキスト形式でワープロに打ち込んでもらった。コード表記は百溪先生のアイデアで，各単語に動物種，総論的分類，および各論的分類の記号をつけたもので，次のコ

ンピュータ処理のために有用であった。原稿はフロッピーとして，学窓社に送付し，当初，1993年10月末を締め切りとしたが，すべての打ち込みが終わったのは翌年の2月であった。

第二次作業として，各編集委員から各分野，各臓器にふさわしい執筆者が推薦され，その数は分科会員47名に及んだが，各委員が打ち込んだ単語を動物種別，臓器別にソートして，それぞれの分担者に送り，チェックしてもらい，不要な単語を削除して，必要な単語を追加した。また翻訳の誤りを訂正したが，この作業がもっとも大変であった。各執筆者に送付したのが2月，回収の目処が立ったのが1994年5月であった。このとき初めて凡例を作ったが，本来は最初に決めておくべきであった。用語については，通常用いられているもの，または各学会採用のものを採用したが，外国語で和訳が2通り以上あるものは，併記または編集委員会の選択によった。ウイルスの分類・命名はInternational Committee on Taxonomy of Virusesによった。

編集に当たって，多数の方々から貴重な意見やお叱りをいただいたが，例えば，現在学生が使用している教科書に載っている用語は網羅すべきである，最近5年間にJ. Vet. Med. Sci.に掲載された病理学関係の論文のキーワードを拾ってはどうか，などで，編集委員の間でアンケート形式により意見を調整し，前者については実現したが，後者については時間的に無理であった。

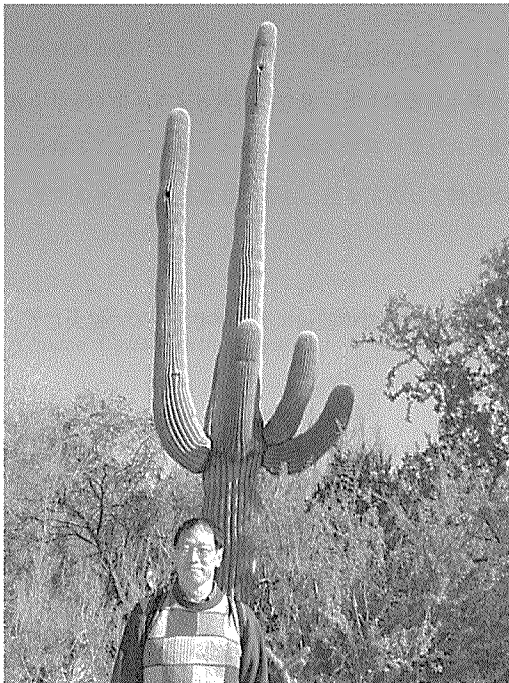
最後に出版社で，コンピューターにより，もう一度アルファベット順とあいうえお順に並べ替えてやっと原稿が仕上がった。本来は1994年4月発行予定であったが，このときすでに7月，それらをさらに筆者と学窓社の阿萬哲大氏で全体を通して校正を行った。阿萬氏の作業は仕事とはいえ，まことに献身的であった。最後の詰めを9月に開催された第118回日本獣医学会の折りに北里大学の一室で行い，布谷，成田両氏に手伝ってもらい，完了時に乾杯した缶ビールの味は忘れられない。編集会議で最後の調整，確認を経た後，印

刷して1994年10月の発行となった。用語集の企画から発行まで実に2年近く要した事になるが、編集委員や執筆者その他多くの人の協力と奉仕がなかったら実現しなかったであろう。

現在、私達は病理各論教科書の作成中で、再び同じようなパニックに陥っているが、その校正にはこの用語集が大変に役立っていて、改めて用語集の大切さを痛感している次第である。発行されてからまだ4年しか経っていないが、その間にも学問はずいぶん進歩し、今回の各論教科書の校正を通じて用語の欠如、不備を多数発見した。当初から完全なものは無理と判断し、逐次改定をしてよいものにしていく計画であったので、今回の教

科書編集の機会に用語集を改訂したい旨、現在の獣医病理学会理事会に申し出たところ了承され、学窓社の了解も得られたので、近々、改訂版を発行する予定である。今回は気が付いた度毎に、メモしてきたので改めて作業は必要ないと考えているが、新たに入れて欲しい用語とか、誤りにお気付きになったら筆者にご連絡いただければ幸いである。この用語集の印税はすべて獣医病理学会に収められ収入となるので、学会の財政強化のためにも是非多くの方に購入して活用していただき、獣医病理学の発展に少しでも役立てば望外の喜びである。

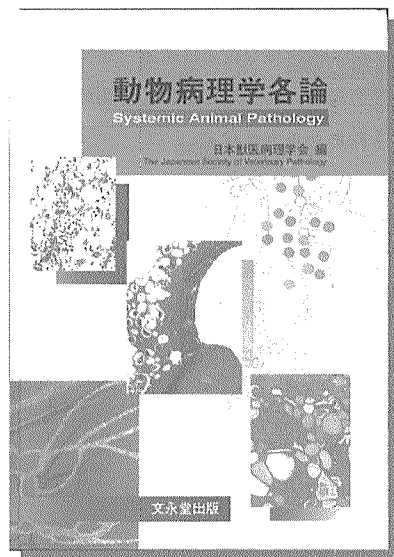
(1998.5.20 記)



アメリカ獣医病理学会ACVP アリゾナ州ツーソンにて



獣医病理学用語集(編集委員長)



動物病理学各論(編集委員長)

< 学部等からの投稿 >

衛星通信による学部レベルの交換授業

農学部獣医学科教授 岡田 幸助

11月26日(火)に大学院連合農学研究科棟に設置されているスペース・コラボレーション・システム(衛星通信システム、以下SCS)を用いて、北海道大学獣医学部と岩手大学農学部獣医学科の4年生の家畜病理学各論の交換授業を行った。これまで大学院レベルでは種々試みがなされており、それぞれ成果を挙げているが、学部レベルでの応用は初めての試みである。ここにその記録と、その直後に学生から取ったアンケートによる反省を記し、今後の参考にさせていただきたい。

SCSの概要 昨年10月2日より、全国33大学、6高等専門学校、10大学共同利用機関に設置された。通信制御は千葉県にある放送教育開発センターで集中的に行うので、各大学ではカメラの切替程度の操作で発信が出来る。出演者(講義をする教官)自身がこの操作を行うことも不可能ではないが、現在のところ学生部の久保事務官に行ってもらっている。通信費用は文部省で負担しているので、授業を行う大学サイドでは無料である。

実施概要

11:00~12:00 リハーサル 最初の試みなので通信状況やカメラワークの練習を行った。

13:03~13:15 SCSの概略について 岡田が書画カメラを用いて行った。

13:15~14:10 講義 「骨疾患の病理：特に発育異常と代謝障害」 板倉智敏教授

前口にファックスで講義のレジメが送付されてきたので、それを学生に配付した。講義は書画カメラを用いて、台紙にはったテロップとプリントした写真を撮影して送信された。

14:10~14:20 質疑 岩手大学の学生より1件の質問があった。

14:20~14:30 休憩

14:30~15:25 講義 「リンパ球の分化と病理」 岡田

レジメは特に用意しなかった。講義は書画カメラを用いて、透過光により通常の35mmスライドをズームで拡大して、撮影送信された。

15:25~15:35 質疑 司会者以外学生からの質問は無かった。

15:35~15:50 SCSによる交換講義に対する意見交換 (司会 板倉教授)

両大学の学生から衛星通信による交換講義の感想を聞いた。

15:50~15:57 交換講義を終えるに当たって (岡田)

予約時間終了3分前に終了したのは、時間がくると直ちに回線が切断されるので、余裕をみて終わるのが良いからである。

アンケート結果からみた反省

黒板を使用する通常の授業と異なり、ノートが取りづらい。NHK教育テレビのテキスト並とはいかないまでもレジメを配付しておくことが絶対必要である。

講義の間、書画カメラのみを使用していると、講義している教官の顔が見えない。講義の途中で質疑応答を入れるなどして時々、教官の顔を映すほうがよい。また一方的にどんどん内容が進んでいく講義の方法はまずい。ビデオと異なり相互通信ができるというメリットを生かしたほうがよい。

小生の講義の場合、割当時間に対してスライドの枚数が多すぎた。ノートが取れないこともあり、衛星放送では余裕を持ってゆっくり明瞭に話すことが必要である。

通常の35mmのスライドをズームで拡大して透過光により、撮影送信することも不可能ではないが、小さな文字は読めない

い。プリントアウトしたテロップの方が見やすい。

テロップといえども細かい表は無理である。1行16文字、7行程度に収めるのが最良である。

スライドの差し替えはホルダー等に入れて手が写らないようにすること。切替の時に画面が大きく揺れたり切れたりする。

講義を聞く学生の顔はあまり写さないほうが良い。学生が眠るのを防止することは出来るが、気が散って授業に身が入らないようである。

質問をする学生のところへマイクを持っていかなければならないので、質問がしにくい。集音マイクなどを用いて、自由に質問が出来るようにする必要がある。

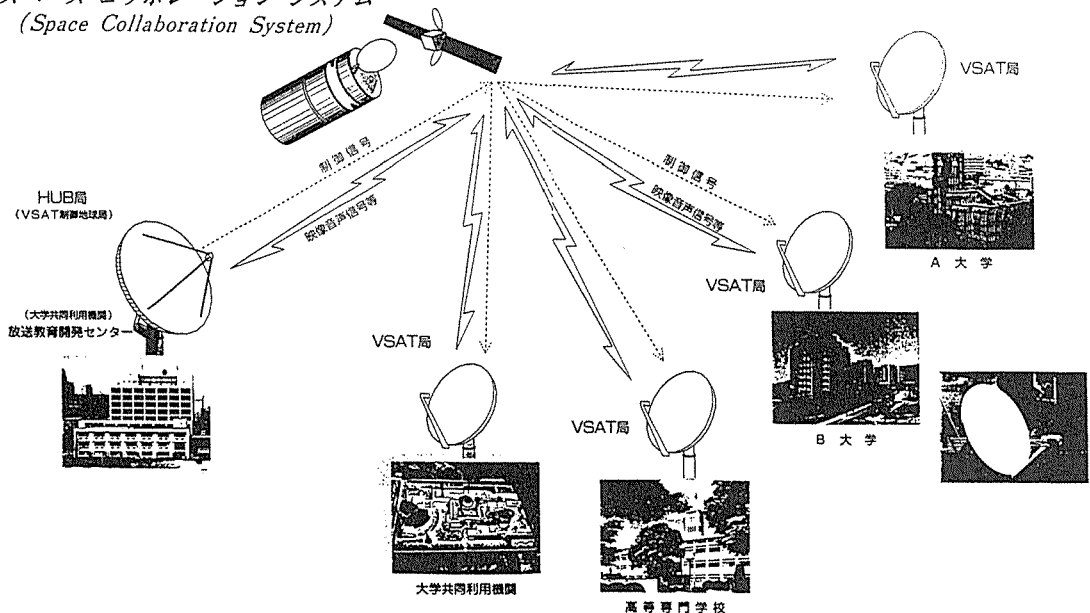
SCSはテレビ電話ではないので、私的な会話は謹まなければならない。

講義よりも解剖や手術など実習を見たいという希望が多かった。また学会やシンポジウムの中継をして欲しいという意見もあった。

まとめ

色々反省点を書いたが、SCSにはそれにもましてメリットが多い。その一つにSCSには自分の大学には無い講義項目を学生が移動することなく聞くことが出来るという大きなメリットがある。学生自身が他大学でどのような講義が行われているかを知ることが出来るよう、関連大学にシラバスを配付したりインターネットで公開するなどの工夫が必要であろう。今後、リアルタイムの特徴を生かし、色々工夫して積極的にこのシステムを活用したい。(投稿)

スペース・コラボレーション・システム
(Space Collaboration System)



主がお入りようなのです

岡田幸助

私は昭和十九年満洲遼陽市で生まれ、明治の社会福祉家である留岡幸助の名前をいただいて、幸助と命名された。男ばかり四人兄弟の長男である。三歳の時、祖母に手を引かれながら、オシメを唯一の財産として、京都市下京区に引き揚げてきた。父は京都で醤油の小さな町工場を経営し、そこで、龍谷幼稚園、七条第三小学校、洛南七条中学校へ通った。

我家は祖母の代からのクリスチャンホームであったので、毎週日曜日には市電に乗って洛西教会とその日曜学校に通った。動物が大好きで月に一度は自分一人で市電にのって動物園に行ったことを覚えている。夏にはYMCAのキャンプに参加し、その時覚えたキャンプソングやゲームを四十年もたった今でも良く覚えていて、CSで子供連にやってみせたりしている。父は醤油工場を経営するかたわら、四十歳にして大学検定試験に合格し、同志社大学に入学し、社会福祉の勉強を始めた。しかし無理がたたって結核に罹り、工場は廃業、三年間の療養生活が続いた。その時弟の誠は大阪の親戚に預けられたのを覚えている。父は片肺摘出の大手術後、無事回復した。回復後、私が中学三年になる時四国善通寺市にある米国長老派ミッションにより建てられた、善通寺キリスト教学園に迎えられることとなり、一家は四国に引越した。そこは小使いさんから学長にいたるまで全員クリスチャンで、定時にはチャイムがなり、構内にある改革派の教会で礼拝を守るというすばらしい環境であった。その大学は現在四年制の四国学院となっている。高校は善通寺第一高等学校に入った。四国学院内の日本キリスト教団系の先生で善通寺赤門伝道所が民家を借りて作られ、私はここで最初に受洗した一人となった。洗礼をさずけて下さったのはパークスディール宣教師である。先生は後に国際キリスト教大学教授として移っていかれた。前述の赤門伝道所は現在の日本キリスト教団善通寺教会である。高校時代は生物部、音楽部とクラブ活動に積極的に参加し、充実した学園生活を送ることができた。

また当時、四国教区香川分区のKKS（教会高校青年）の会長として年三回の修養会やキャンプを企画し、その修養会において信仰の基礎を学ぶことができた。高校三年生の時に兵庫県三田の千刈キャンプ場で開かれた全国KKSキャンプのことは今も忘れることができない。終了後会があまりにも盛り上がり、ボランティアの大学生がふざけて川に飛び込み溺れて死んだが、死をまのあたりにして、生を深く考えさせられる機会となった。

大学進学は生物学が好きだったので、理学部か医学部か獣医学部に進みたかった。当時の私の浅はかな考えで理学部は実用的でないし、医学部はお金がかかるし、獣医が適当と考えそこに進むこととした。ところで私達の家は家畜を飼っているわけでもなく、親戚など関係者に誰も獣医の人はいないので、父は私立大学の関係の集会で知り合った酪農学園の牛島先生（後の学長）に手紙を書き、どの大学をめざせば良いのか適当な大学を紹介していただいた。その返事によると、まず北海道大学、次に岐阜大学、そこも落ちたら自分のいる酪農学園（当時はまだ獣医学科はなかった）へいらっしゃいということであっ

た。残念ながらエルムハカナシ（北大は落ちたいという電報の略号）で、岐阜大学に進学した。

大学では寮生活、馬術部、アルバイトと非常に多忙であったが、唯一の教団の教会である華陽教会に出席し、CS教師を始めた。実は華陽教会にはCSがなかった。昔はあったのだが、教師がいなくなり、中断していたのである。そこへ私が飛び込んできたので、神原正美牧師は私と幼稚園の女の教師の二人でCSを再会してくれるようにとたのまれた。今までこのかた十八年間、CSの生徒としてすごしてきたので私なりに、大学生になったらCS教師としてこんな風にやりたいというものがあった。両親と相談後、CS教師を引き受けることとし、六月の花の日、子供の日をCS再会の日とした。

小学校の前でチラシを配ったり、卒園生にハガキを出したりして、二、三〇名集まったであろうか、ところがCSを始めて、一カ月もたたない内に、神原牧師が結核の再発で入院することとなった。そこで青二才の私と幼稚園の先生の二人でCS全てをやらなければならなくなった。一生懸命、夏期学校、収穫感謝祭、クリスマス等色々企画してやった。判らないことや困ったことは、お見舞をかねて療養所をたずね、神原牧師から御指導をいただいた。また全国規模のCS教師研修会にも毎年参加させていただいた。その間にはずいぶん牧師の家族や教会員の方々とぶつかったりもした。

大学を卒業して岐阜を去る時、教会学校の継続と教師の継続がいかに大切であるか強く知らされ、「自分もCS教師を続けるから、華陽教会のCSも続けて下さい」と挨拶したように思う。これがその後三二年間現在もCS教師を続けている原点となった。余談ではあるが神原牧師は現在もお同じ結核療養所で闘病生活を続けておられる。神原牧師が引退された後、赴任してこられた牧師が癌で天に召されたことを考えると不思議な思いである。

昭和四二年四月ようやく夢がかなって北海道大学大学院へ入学することができた。獣医学の世界では東大系と北大系の二大学閥がある。私の専攻した病理学教室は、人工癌を世界で始めて作りノーベル賞候補ともなった山極三郎（東大医学部）、市川厚一（獣医）という二人の学者がいるがその市川先生が初代教授で、多数の有名な先生を輩出した名門の教室であった。修士課程の二年間は、クラブもアルバイトもやらず、只ひたすら研究に没頭した生活であった。但し日曜日だけは教会に行き、CS教師をさせてもらった。

当時大学紛争が盛んで、北大も例外ではなかった。学生どうしても派閥に分かれ、熱心に論議するうちは良かったが、遂には憎み合うようにすらなってきた。その時救われたのが、教会の礼拝説教であった。「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい（マタイ一〇章一六節）」この御言葉のおかげでどの派閥に引ずり込まれることもなく、自分の生き方を主張することができた。研究室の中でも色々なことを言われ、つらい事の連続であった。しかし日曜日に教会に行くとそのことを忘れることができた。

教会は札幌教会に行き、金井輝夫牧師が個人的に色々な相談にのって下さった。修士課程を修了し、博士課程に進学した。昭和四四年、丁度助手の席が空き、私はその教室の助手となった。

私は昭和四十六年十一月二八日に、信子と結婚した。彼女は北海道江部乙のリンゴ農家の長女で、工業高校を卒業し、化学を専攻したため、北大の結核研究所の技官として勤めていた。彼女は本田弘慈牧

師の特別伝道集会でキリスト教を知り麻生教会(札幌教会の伝道計画の一環として創られた兄弟の教会)で洗礼を受けていた。クリスチャンになってから思うところあって、夜間学校に通い保母の資格を得た。その後北大の研究所を退職して、精薄施設の保母となった。私は北海教区の青年会修養会で彼女と知り合いになっていたが、その転職を知り彼女に強く引かれるところとなった。一年間のおつき合いの後、札幌教会で結婚式をあげた。青年会の皆が手作りでパーティーをしてくれた。

昭和四十七年十一月二日、長男正幸が生まれた。その時急に世の中が明るくなったような感動を覚えた。正直者が幸となる夢を託して命名した。昭和五〇年九月二日長女のぞみが与えられた。正幸が幼稚園に入園を考える頃、札幌教会では付属幼稚園の廃園問題がおきていた。私はCSの校長と役員をやっていたが、まだ幼稚園の使命は終わっていないと考えたことから、幼稚園継続を主張する側に立った。何回にもわたる激しい論議の末、廃園が決定した。役員クラスの信徒は二分し、十数人が教会を去った。私もその内の一人で、正幸が真駒内教会(この教会も札幌教会の兄弟教会)の付属幼稚園に行っていたので、住居も真駒内に引越し、一家は教会籍は札幌教会に残したまま、真駒内教会に出席した。真駒内は札幌オリンピックの開かれた所で非常に美しい街並で公園も整備され自然にあふれていた。教会の牧野富士男牧師夫妻は私達を暖かく迎えて下さり、大変お世話になった。二男の牧男は先生の名前の頭とシッポをいただいたものである。

昭和五十三年十一月一日、岩手大学農学部助教授として赴任してきた。岩手大学は北大と比べて第一線の現場とのつながりが強く、色々現在問題になっている家畜の病気を目のあたりにすることができた。昭和五十四年四月、北大で行っていた鶏のマレック病の研究が認められて獣医学会賞をいただいた。昭和六十一年文部省科学研究費をいただいて電子顕微鏡を購入することができた。私の授業は判りやすいと、評判が良いらしいが、実はCS教師を続けたことで身についたものである。

昭和六十三年、長年の夢であったアメリカ留学が実現した。北大時代から何度も話がでてきたが、その度ごとに立消えとなったものである。いやがる家族を説得して、全員で行くこととした。アメリカ北西部ワシントン州プルマンにあるワシントン州立大学の客員助教授として迎えられた。牧男はフランクリン小学校、のぞみはリンカーン中学校、正幸はプルマン高等学校とアメリカの子供が小学校から大学までどのようにして成長するか教育システムの全てを知ることができた。一年間の留学で三倍の体験をすることができたわけである。

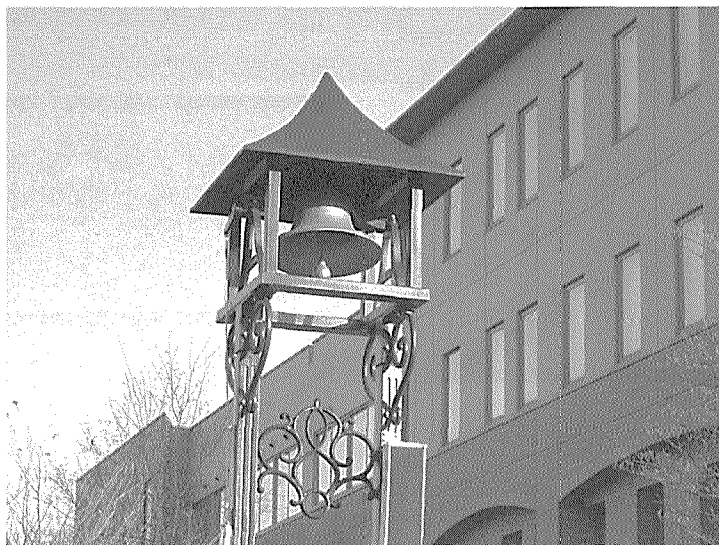
プルマンは人口二万数千人の大学だけの町である。周囲には広大な麦畑がはてしなく連なり、その他何にもない。教会はアジアの人達に開かれたエバンジェリカルフリーチャーチに出席した。そこでは礼拝の後、英会話も教えてくれて、その中で生活情報も教えてくれた。もしこの教会の交りがなかったら、どんなにつまらないものとなったであろうか。アメリカは自動車がなければ生きていけない。自動車は一台しかないの、買物その他、何をするにも一緒に行動しなければならない。そのため家族が何を考え、どんなものを買うのか、日本にいるよりも良く判った。また家族でカルフォルニアやカナダに旅行した。あのような旅行はこれから二度とできないであろう。私の英語はさっぱりうまくならなかつ

たが、子供達は自分のものにすることができた。研究面では相手の研究室のことを全く知らないで行ったのであるが、世界でも指折りの研究室で、帰国後私の研究が大いに飛躍することとなった。

平成四年九月より教授に昇格した。いきなり学科委員といって学科の代表者となり、種々の会議の招集や、学生の就職の世話、各種の挨拶をさせられることとなった。人前での話はCSで慣れていたので、そんなに苦労はなかったが、一番困ったのは動物慰霊であった。元来この慰霊祭は実験用に殺した動物のたたりを恐れて行うもので、昔は神官を呼んで行っていた。靖国闘争もあって、国立の大学が特定の宗教を取り入れるのは良くないということで、二十年程前から教授が祝詞をあげるようになっていた。遂にその番が自分に回ってきたのである。

このような場合、キリスト教ではどのように考えたら良いのであろう、旧約聖書では動物をいけにえとしてささげている。しかしむやみやたらに動物を殺して良いはずがない。動物に「あなたの命をむだにしません、あなたの命を人類福祉のために役立てます、あなたの身体を使ってしっかり勉強させていただきます」という感謝と決意の祈りをささげた。これに参集した多くの学生、教官に大きな感動を与えたようであった。

現在、長男正幸は大学四年生、長女のぞみは大学二年生、次男牧男は高校二年生で、全員家を離れ、藤沢、京都、イギリスとばらばらに暮らしている。子供達も、私が高校、大学生であった頃と同様に将来の進路で悩んでいるらしい。三人共まだ洗礼を受けてないが、一日も早く決心する日が来るよう望んでいる。大学や学会でも色々な責任が増し、超多忙の毎日である。しかし「忙しい」と、あまり言い訳をしないことにしている。忙しいとは心が亡びると書くからである。大学の教室の責任を負わされて、色々将来の研究や教育に不安や迷いがある。しかし「自分のことで思い悩むな、空の鳥を見よ」とあるように主におまかせして、主のお入用に應える日々を送っていきたい。



「上田の鐘」 元来上田キャンパスの農学部畜舎の上にあったが、永らく滝沢農場に移設されていた。平成19年(2007)現在の図書館前に設置。

●レター

岩手大学獣医学科の標本室収蔵

目録作成

岡田 幸助

Kosuke OKADA

岩手大学農学部家畜病理学教室

(〒020 盛岡市上田 3-18-8)



昔はマレック病、最近は牛白血病の免疫の研究をやっています。平成4年から家畜病理学講座を担当し、御領政信助教授とコンビを組んでいます。岩手県鶏病研究会で鶏病一般にも興味を示しています。目録をご希望の方はご連絡いただければ送付いたします。見学歓迎。

*Museum of Veterinary
Medicine*



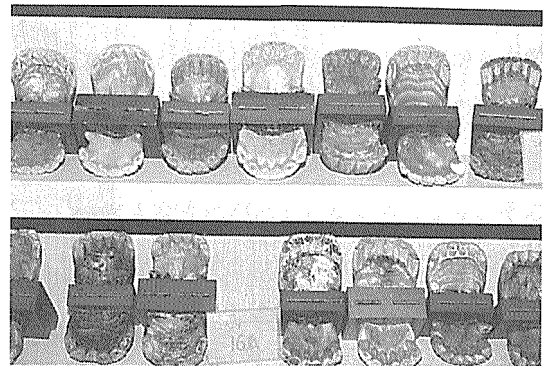
1994
Faculty of Agriculture, Iwate University

目 録

最近写真技術や映像技術が発達し、標本を非常に鮮明に記録しておくことができる。しかし学術的資料として実物がそのまま保存展示されているのに勝るものはない。岩手大学標本室の中にどれほどの標本が保存されているのか、かつて大島寛一前教授により標本室台帳の作成が着手され、512点が既に整理されていたが、多くは未整理のまま残され、正確な数字は不明であった。



標本室全景 昭和38年落成



馬の年齢鑑別用歯牙標本
当歳から21歳までそろっている



馬の骨格標本
アンジュール号(手前)とドブシー号



寄生虫標本

この度、文部省からの特別の予算をいただき、本目録を作成することとなった。度重なる標本室の引越や、毎年のホルマリン交換に際して、破損したのもも幾らかあり、今回改めて全標本の調査してみることにした。学生諸君の応援を得て、全標本のカードを作成し、整理したものがこの目録である。結果的に標本は全体で約2,000点あり、30%が整理済み、残りの70%が未整理であったことになる。標本瓶のラベルに記載のないものも多く、字が読めなくなっているものもあった。また学問の進展により、病名の呼び方や、寄生虫の名前が変わったものもあるが、標本が採取されたその時代の考え方を大切にして、この目録ではあえて修正はしなかった。今後、この目録をたたき台として、研究調査し、さらに完全なものとしていきたい。

当標本室の標本には世界的見地において稀有かつ貴重なもの、国内的に稀有かつ貴重なもの、歴史的に貴重なものなどが多数あった。今回の調査を通じて、盛岡高等農林、後の岩手大学の諸先生方がいかに研究と教育に情熱を傾けておられたかがよく分かった。また標本の収集に全国各地からの多くの協力者、即ち標本寄贈者がおられたことも知った。これらは重要な文化遺産であり、全人類の共通財産である。データベース化等を行い、将来とも教育研究その他に、永くその活用を計らなければならない。

沿 革

明治35年3月盛岡高等農林学校が設置され、獣医学教育が開始された。家畜病理学教室の初代教授である可児岩吉先生はその当時から標本収集に努められたと思われる。開学9年前の馬の皮様嚢腫と黒肉腫の標本が最古のものである。その後今日まで100年間の長年にわたって獣医学の教育・研究用の標本が収集整理され、保管されたことはまことに驚異に値する。その数、約2,000点、牛、馬、豚、鶏など産業動物全般にわたり、犬、猫などの伴侶動物も当初から含まれている。標本はそれぞれの動物の重要疾病をほ

とんど網羅すると共に、各時代を反映し、現在のわが国ではほとんどみられなくなった馬の伝染性貧血、鼻疽など貴重な歴史的標本も存在する。

明治44年に着任された菊池賢次郎教授は特に病理学、寄生虫学に興味を持たれ、数多くの貴重な標本を収集整備された。その種類は現在でもなお日本一である。

昭和28年度より、特に本学のために文部省から標本維持費が配当され、以来標本瓶の整備、固定保存液の更新、新標本の作製補充などその維持整備に努めてきた。標本採取には菊池賢次郎、三浦定夫、大島寛一の歴代教授が当たられたことは勿論であるが、展示標本を作製した田中、沼宮内阿氏および専攻学生の陰の力は忘れることができない。

当初、このように貴重な標本が旧木造校舎の一室に保管されていたが、火災の不安を抱えるため、昭和29年当時唯一の鉄筋コンクリート建造物であった教養部理科棟に保管された。昭和38年、現在の標本室が建設され、その後暖房器の設置、床の張り替えなど数回の補修を経て現在に至っている。

収蔵点数

循環器系	167	運動器系	107
造血器系	58	内分泌系	5
呼吸器系	147	皮膚	63
消化器系	406	奇形	89
神経系	75	寄生虫	331
泌尿器系	142	その他	289
生殖器系	109	総計	1,988

標本室は現在既に過密状態にあり、最近の標本を追加展示する余地がない。またさらに標本の学問的価値を高めるために標本の研究調査をする専門の教職員も必要である。標本室の整備拡充と人員の増加にご理解を切望するものである。

末筆ながらこの作業を喜んで協力してくれた学生諸君、寄生虫学名に関するご校閲をいただいた坂本 司教授に感謝する。

第一回目の学位受領者を送り出して



今年3月に無事、千葉達成君と村上賢二君の学位論文が完成し、学位を授与することが出来た。全てがはじめてで、どのようにしたら良いか分からず、大変忙しかったが、夢中でやってきたので、非常に感慨深いものがある。両名は元来、大島寛一教授の指導の元に入学してきたのであるが、先生の退官を間近に控えていることから、大島先生のご配慮により、研究課題の設定、実験計画の作成を入学当初から小生に任せてくださった。従って博士過程途中での主指導教官の変更という事態にもスムーズに対処することが出来て幸いであった。大島先生には当研究科の設立に大変尽力を尽くしていただいたが、その果実を味あうことなく退官されてしまい、後輩の我々がその最も美味しいところを味あうのは誠に申し訳なく、大島先生のみならず既に退官された先輩の諸先生に心から感謝しているところである。

千葉達成君は仙台市で小動物の病院を開業している獣医師である。盛岡と仙台は新幹線で片道約1時間、往復で切符代が約1万1千円もかかる。教室には後輩の学生がおみやげを待っているのも、そのお菓子代も馬鹿にならなかったと思うが、彼の病院の休診日の木曜日にはせせせと通って来てくれた。彼の学位が完成したのも、彼自身の努力はもちろんであるが、彼の奥様の内助の功もおおいにあってのことと思う。彼のテーマは牛の白血病であったが、このテーマは彼の修士論文の時から継続課題とはいえ、日常は小動物を診療し、学位論文では大動物を扱わねばならず対象動物が異なった。それぞれ頭の切り替えが必要で、また自分の病院の経営と学問研究との間で大変な葛藤と苦労があったことと推察する。彼の研究内容は無事、外国の専門誌 *Leukemia* に掲載されることとなり、めでたく学位記を手にする事が出来た。

村上賢二君はある企業の研究所に勤務していたが、

主指導教官：岡田幸助(岩手大学)

対象修了生：千葉達成

村上賢二

その会社を退職して、当大学院を受験してきた。彼はいわゆるフルタイムの学生で、一日24時間、研究に心血を注いだ。ちなみに今回、本研究科で学位を取得した11人の学生の内、結果的に彼は唯一のフルタイム日本人学生となった。指導教官として研究成果もさることながら、最も気がかりであったのは、彼が学位取得後どこに就職するかということであった。彼の努力の結果、農林水産省家畜衛生試験場に就職することが出来て、胸をなで降ろしている。我々は病理学の分野に分子生物学の手法も取り入れなければならないと考えていたが、その目的もあって、彼はつくば学園都市にある理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センターで1年半の間、分子生物学等の研修をすることが出来た。この研究所は日本でも最高級の研究設備とスタッフを揃えており、著名な外国人研究者もしばしば訪問し、大変恵まれた環境にある。それだけに高いレベルの研究成果が要求され、彼はそこで研究の厳しさも十分味わったことと思う。その間、直接ご指導いただいた

間陽子研究員をはじめ井川洋二、天沼宏両主任研究員のご支援に感謝を忘れることが出来ない。彼の研究内容は *Vet. Pathol.* および *Am. J. Vet. Res.* に掲載され、学位を手にする事が出来た。学位取得後、博士過程の時に行っていた関連研究が *Virology* に掲載され、今後の発展がおおいに期待される。

今回の学位授与に際し、自分の学位取得の時の恩師のことを感謝をもって思い出さずにはおれない。副査や副指導教官の先生方とともに、2人の学位論文の作成に携わることが出来、苦労というよりは喜びと感謝でいっぱいである。博士号は研究の完成というよりはむしろ研究者としての出発点であると思う。今回博士過程を修了された方々が、今後多いに社会で活躍されることを祈念して、小生の感想文とする。

研究室だより

(27)

岩手大学 家畜病理学教室

秀麗なる岩手山をまぢかに見上げるここ盛岡市は、市内を北上、中津、雫石の三本の川が流れ、四季折々の風光明媚な街であります。また、宮沢賢治、石川啄木が青春時代を過ごした街としても知られています。岩手大学獣医学科は、明治35年にわが国最初的高等農林として設立された盛岡高等農林学校を前身として発足し、以来長い伝統と歴史を持ちさまざまな分野に多くの先輩方を送り出してきました。わが教室は過去、可児岩吉（明治36年～大正9年在職）、菊池賢次郎（明治44年～昭和33年在職）、三浦定夫（昭和27年～昭和53年在職）の各教授が担当されてきました。

現在、我々の家畜病理学教室は、教授の大島寛一先生、助教授の岡田幸助先生、助手の沼宮内茂先生の3名の教官と、ドクター2名、6年生4名、5年生4名の計13名で構成されています。外国から中・長期間にわたる研究・研修に教室に来られる方も多く、また地元の自治体などから短期間滞在される研究生も跡をたたく何時も活気に満ちています。大島先生は家畜病理学はもちろんのこと、その他多種多様のあらゆる事柄についてお詳しくかつ器用で、書道、篆刻、大工仕事などの腕前はプロ級です。先生は本年より岩手県獣医師会会長になられ一層多忙な毎日を過ごされています。岡田先生は昨年アメリカ留学より帰国され、現在、每晚遅くまで研究されています。先生は非常に分かりやすい講義をされることで本学学生人気 No.1 の先生です。また、飲んで歌われる「宇宙戦艦ヤマト」を一度聴くと生涯忘れ得ぬ思い出となるでしょう。沼宮内先生は、病理解剖においてかける気合いとホースの水の飛沫で病理解剖とはいかなるものかを教えて下さいます。学生の研究活動からプライベートなことまでのあらゆる相談を受けていただけるホットで人情溢れる先生です。

教室のテーマには大きく二つの柱があり、一つは「ウシ白血病の病理発生の解明とその防除法の確立」です。ウシ白血病に関するマクロからミクロまで、その形態学的、免疫病理学のおよび分子病理学的に病理発生の研究を行っています。最近組換え DNA ワク

獣医畜産新報 Vol. 43 No. 12 (1990)

チンの研究も行っていきます。もう一つは、「競走馬の主に運動器疾患の研究」です。現在は、骨折ならびに関節症に関する研究を行っています。過去1年間に大動物を中心に100頭以上の解剖が行われました。

教室では成牛1頭（四郎）、子牛6頭、羊21頭、犬1頭（クマ子）を飼育しています。日常の生活は毎日朝8時30分より始まります。学生はその時間に登校し牛や羊の世話と教室の掃除を済ませて先生方をお迎えすることになっているのです。遅刻すると教室員全員にケーキをご馳走しなければならないという奇しき風習があるのどっかり遅刻はできません。朝寝坊の学生には大変辛い教室かも知れません。自分の誕生日に自らケーキを皆さんにご馳走するという習慣とあわせると年間を通じ多くのケーキを食べている大変甘いもの好きの集団です。またこの教室独特な風習として朝夕ほとんど毎日行われるお茶会と呼ばれるミーティングがあります。学生全員そろって先生方と顔を合わせ、夕方のお茶会ではお茶菓子を食べながら剖検診断のまとめや、テレビの相撲見物をします。また、教室の仕事や自分の論文などの忙しい合間をぬって、春には花見、初夏と秋には温泉旅行、夏には海へ、冬にはスキーツアーなどの年中行事を持ち、担当する5年生は全責任を以て企画運営を行っています。このように先生方と学生とのコミュニケーション（コミュニケーション）は完璧に近いとまでいわれているすばらしいところなのです。我々の教室には、「土方から電頭まで」という合言葉があり、先生方を先頭に教室員一同が協力しあい日夜研究活動を行っています。

（文責：村上賢二）

右：雪ダルマで遊ぶザビニアからの研修生マクセルと学生

下：標本室の前で四郎・クマ子とともに



資料

鳥インフルエンザ発生国：タイとベトナムの現状

岩手大学農学部応用獣医学講座
岡田 幸助

1. はじめに

アジア諸国においては鳥インフルエンザ (AI) の大規模発生および人感染死問題が報道されているが、それらには興味本意での不安をあおるものが多い。日本養鶏協会から、鶏病専門家によるアジア諸国の鶏の衛生状況と本病の発生問題についての科学的分析、および国内の養鶏生産者への情報提供が殆どなされていないので、タイ・ベトナムにおけるAIの現地調査と関係情報収集を行ってほしいと依頼があった。まさか自分が行くとは思ってもよらなかったが、私と生澤充隆君 (大学院生, 博士課程1年生) の2人で5月20日から29日まで訪問した。訪問先の選定はJICAを通じて現地の事務所から紹介していただいた。

2. タイ

中規模養鶏農場の多いチャチュンツアオ県にある農協のマネージャーが面会に応じてくれた。以下は彼の話である。「2004年の2月から4月にかけてこの県では数10万羽の鶏にAIが大発生した。政府の命令で発生地から直径10km以内の80%の鶏が処分された。残りの20%は農場の密集地以外につき処分されなかった。AIの発生になぜ気づいたかといえば、異常な数の鶏の死亡が起こったからである。2004年2月3日に発生というのが公式の発表である。この地区における発生農場は2カ所で、1つは2万羽飼育、他の一つは1万羽飼育であった。日常でも1日に10羽ぐらいは死ぬが、それが数百羽に増加し

た。この病気はニューカッスル病でもない、いかなる薬も効かない。それでAIと分った。最初の頃は鶏の首を絞めて殺してから袋に入れていたが、余りにも鶏の数が多くそれもできなくなり、生きたまま袋に入れて穴に放り込んだ。穴はそれぞれの農場の敷地内に掘った。2004年の年末から鶏の飼育を一部再開し、2005年始めから本格的に再開した。飼育再開後AI予防のために、鶏舎構造をオープン鶏舎から無窓鶏舎にし、人の出入りを管理している。車輪の消毒を徹底し、鶏舎に網をはり、野鳥や虫が入れないようにした。タイではワクチンは禁止されているので使用していない。AIは最初にナコン県において発生し、渡り鳥を媒介してスパンブリ県を経由し、ここに伝播して来た。伝播経路は鶏の移動、風、水流であると思う。乾燥している地域では発生が少なく、水系が関連していることが疑われる。この地域でAIの感染が疑われた人はいたが、死者はいない。」

インタビューの後バンコクに移動し、車中で通訳の安田氏より以下の情報を得た。「2004年の2月には毎日のようにAI関連の翻訳の仕事があった。今回のAI発生でタイは鶏肉の加工能力を身に付けることができ、良い薬になった。ペットの鳥もAIで処分された。タイは闘鶏が盛んで、大切な鶏を殺されてはかなわないので闘鶏の鶏を抱えて逃げた人もいた。動物園の鳥類は処分を免れた。しかしダチョウは処分された。鶏を動物の餌として使用しておりトラの死亡例があった。」

スーパーマーケットの店内の様子は日本のそれとほとんど変わらない。「過熱された鶏肉、鶏卵はAIの心配はありません」の表示があった。生鮮市場で鶏の売り場は入り口付近ですぐ見つかった。アヒルや闘鶏の生鳥を籠に入れて売っている店も見かけたが、大部分は店頭で鶏を殺して、解体した鶏肉を売っていた。

プロイラー加工輸出協会の Pornsri Laurujisawat 女史の説明によると「協会ではプロイラー肉の生産、加工、輸出を扱っている。AIの発生により生鮮肉の輸出はできなくなったが、加工肉は輸出している。加工肉には日本人向けの焼き鳥、唐揚げなどが含まれている。タイにおけるAIの最終発生日よりOIE（国際獣疫機構）の基準である120日をすぎたので、生鮮肉の輸出を認めてほしい。現在、鶏肉（加工肉）の輸出は35万トンを目指している。日本へ50%、EUへ30~35%、残りはその他の国である。アヒルも7万3千トン輸出している。日本へは5%、EUに90%である。」と言うことであった。

バンコク市内にあるJICA家畜疾病防除計画プロジェクト事務所の佐々木正男リーダーは「AIはタイの大きな農場では発生していない。タイでは鶏の放し飼いを止めようとしている。そのために政府は農場に資金を貸し付けている。アヒルはキャリアとなるので池のそばで放し飼いにすることを禁止している。しかし田舎ではどうしようもないのが現実である。」という。「タイにおける最終発生は昨年11月である。生鮮肉の輸出では大変な打撃を受けたが、加工肉で挽回することができた。タイは冷凍、冷蔵肉の輸出から、加工肉の輸出へ戦略を変えた。タイではX-rayサーベイと命名された全国規模の調査が行われている。全土を7つの地域に分けて、AIの疫学調査と疑わしい鶏からサンプリングをしている。ワクチンの使用は禁止している。これは偉いと思う。またタイでは闘鶏が盛んであるが、鶏に口移しで餌をやるなどしている人に感染し、人の死亡例が発生した。」と

語っていた。次いで、このプロジェクトに訪問中のミャンマーとラオスの研修生は「これらの国には中国から卵や初生雛が密輸などで入ってきている。メコン川に橋が建設されたりして、国境の警備が困難になっている。病気にとって国境は無いに等しい。」と話していた。

国立家畜衛生研究所のAIの検査としてはウイルス分離（卵と細胞培養）、Real time PCR、PCR/Gene sequencingを行っていた。

3. ベトナム、ハノイ近郊

家畜健康省畜産局のNam局長、Quynh 副局長と面談した。「ベトナムでは2003年の終わりと2004年にAIが発生した。2005年12月15日の発生が最後でその後発生は無い。OIEの基準を参考にしてワクチンを使うことにした。もちろん移動を禁止して殺処分することが理想的である。しかしベトナムでは各所に散在して鶏が飼育されていて、殺処分での対応は困難である。2005年8月からワクチン接種を開始した。ベトナム64省の内47省では90%、残りの省では60%の接種が完了した。全国的に平均して8割が接種され、良い結果を得ている。鶏は元気で、ウイルスは残っていても、環境には出ていない。ベトナムではこの日までにAIの感染で42人が死亡したが、そのほとんどが消費者であった。多くの鶏が殺されたので、鶏の数が足りなくなり、その結果、コストが上がった。中国の鶏は安く、1/10である。AIが発生して、市場にアヒルや鶏の生鳥がいなくなった。また食品安全確保のためにルールを決めた。しかし行政的にはあまり改善されていない。メコンデルタ地帯にはアヒルが一杯いる。アヒルの飼育場を網で囲み移動しないようにしているが、なかなか徹底されていない。行政、飼育者、消費者が協力してAIと戦わなければならない。」と語っていた。

畜産局と同じ建物にある国立獣医診断センターの副所長のホさんらと面談した。「ベトナムの人口は8千万人、ハノイを首都とし、64省から

なる。農業が30%、その内養鶏は19.7%である。鶏の飼育羽数は1億9千2百万羽、アヒル6千8百万羽、しかしAIが発生して2003年以来減少している。AIの対策は、1に発見、2に対応、3に予防である。AI対策委員会の組織は国立獣医診断センターと6地区にある検査センターで、その下に局、県、村の組織がある。第1回目の発生は2003年12月27日で、その後381地域に及んだ。64省中57省の60%で発生した。2月27日までに15地域で4千3百9十万羽に発生、内アヒルが1千3百万羽、鶏が3千万羽(鶏全体の16.8%)である。第2回目の発生は2004年4月から9月まででベトナム北部の15省で6千6百4十万羽が死亡した。鶏は68%、アヒルは5%、その他の鳥は27%である。第3の発生は2004年末から2005年にかけて発生した。北部15省、南部21省の1百8十万羽が死亡、内鶏は25.5%、アヒルは44.7%、水鳥は29.8%である。終息後、抗体のサーベイを行っている。2005年11月以降ウイルスは分離されていない。2005年8月からワクチンを接種した。ワクチンはベトナム政府が負担し無料である。診断にはウイルス分離とPCRを行っている。対策として設備のレベルアップ、技術の訓練、動物と人の関係対策、都市内での飼育禁止(農村では無理である)、アヒルの孵化禁止を行っている。」

5月25日にビンヒチュー村役場の経済部長を表敬訪問した。部長自ら水田のような方形の人工池にアヒルを数百羽飼育している農家を案内して下さった。翌日ハノイ市街を探索した。市内で生きた小鳥を売ってはいけないことになり、元来3軒あった小鳥屋は1軒になり、それも小鳥はいなくなり鳥かご屋になっていた。生鮮市場の鶏肉店ではフリーザーが用意され、卵や加工肉が売られ、生鳥を売っている店は見つからなかった。しかしロンビエン市場で田舎からバスで持ってきた鶏やアヒルを、数人で分け合せてオートバイに積み込んでどこかに去っていくところを偶然目撃した(写真1)。生鳥の販売禁止は必ずしも守られていない。

4. ベトナム、ホーチミン市近郊

家畜改良所勤務のBacさんからベトナムの養鶏事情を聞いた。「ドンナイ省はAIが発生する4年前は大きな養鶏地帯であった。しかし現在はAIの発生により小さくなった。一方、国営の大きいところはさらに大きくなった。鶏肉は現在口蹄疫の影響もあって高騰している。AIが発生する前は1万5千ドン(103円)/kgであったが、発生時8千ドン(55円)に値下がりした。現在は5万ドン(344円)である。ベトナムではAIが発生してから、食鳥処理場を作り、生鳥市場はなくなっている。それに伴い設備投資が必要であるので、ベトナムの養鶏産業の機械化に日本も協力していただきたい。ベトナムにおけるAIは最終発生から4ヵ月も発生がない。もちろん人の感染例もない。」ベトナムはカンボジア、ラオス、中国から密輸があるらしい。田舎ではAIが出てても内緒にしている事例があるそうだ。

ドンナイ省の肉用鶏農場を見学した。ここではブロイラー鶏を7千羽飼育している。以前は1万数千羽飼育していたという。この農場は中規模で、2万羽ぐらいの大きいところもあるそうだ。孵化場でAIワクチンを1日齢に接種した雛を買ってくる。ワクチンを接種した証明がなければ販売することができない。

訪問した採卵鶏農場では1万羽飼育し、卵の集荷は週に4回。大きい卵は1個1,500ドン(10円)、小さいのは1,300ドン(8円)である。AIの発生した農場は川から水を取っている養鶏場がほとんどで、この農場では水道水を使用しているので発生はなかったという。ワクチンは0日齢、14日齢、28日齢そして6ヵ月齢で1回ずつ接種しているという。

次に訪問した鶏肉/卵兼用の有色鶏農場は高床式の鶏舎で平飼、床が簀子になっていた。「H5N2のワクチンを打つことが法律で決まっている。ワクチンの空き瓶は返却するか、埋め



写真1 市場の駐車場で／ハノイ市／ベトナム／5月26日

生鳥の販売は禁止であるが、鶏とアヒルを山分けしている。



写真2 アヒル農場／Vinh Phuc 県／ベトナム／5月25日

る。ワクチンは政府が管理しており、動物病院から購入する。千羽以下は無料だが、それ以上の場合には購入しなければならない。この地域でAIは流行しなかったが、2004年の2月テトの祭りの時、鶏は殺され、焼かれた。同年4月に飼育を再開した。養鶏をするためには人民会議の許可を取らなければならない。」ということであった。

孵化場ではオランダ製、ハンガリー製、アメリカ製の孵卵機が稼動し、3週間につき16万個の孵化をしていた。ここの孵化場でAIのワクチン（H5N2タイプ、TROVAC）を初生雛に接種している。ラベルにはAvian Influenza, live fowl poxと書いてあった。鶏痘ウイルスにAIウイルスの遺伝子を組み込んだDNA組み替えウイルスと思われる。

ホーチミン市には食鳥処理場が3カ所あり、夜の9時から処理を開始していた。臨床検査を半月前に済ませ、その書類をチェックするだけで搬入が許可され、病理検査していない。ラインの装置はベトナム製で、1台で3千～4千羽処理できるものが14台あった。ここでは一日に3万羽処理するという。懸鳥後、電気と殺し、人手で内臓摘出していった。鶏は1列で冷却され、日本で使用しているチラー漕より細菌の交差汚染が少ないように見えた。

案内役のBacさんに北部に比べてアヒルをほ

んど見かけないかと質問したところ、「アヒルはAIVに感染しても症状を出さないのだから、アヒルは飼育禁止である。」とのことであった。しかしアヒルの孵化が禁止されているにも関わらず、ハノイではアヒルを良く見かけた（写真2）。「アヒルは川に住んでいるので無許可のアヒルが多い。違反が見つければ、罰金が科せられ、アヒルは焼却処分される。それにもかかわらず飼育したり、販売するのは国民が貧しいからである。生きていくためには仕方がない。」と語った。5月28日 帰途についた。

5. まとめ

今回の視察を通してアヒルのAI対策が最も問題であると感じた。両国ともAIの発生は終息し、パニックは治まっている。生鳥の販売は禁止され、完全には守られてはいないが、確かに減少しつつある。タイはワクチンを使用しないで対策をたてているが、ベトナムでは2005年8月からワクチンを導入した。発生終息後、鶏舎の衛生管理は向上し、鶏肉加工産業が整備されつつある。病気には国境が無いので国際協力と海外からの資金援助が必要であると痛感した。今回の貴重な訪問調査の機会を与えてくださった日本養鶏協会ならびに視察箇所の調整をいただいたJICA関係他多くの方々へ感謝申し上げます。

近くて遠い国 第21回アジア獣医師連合大会 (ソウル)

岡田 幸助

岩手大学支会

10月24日仙台空港を飛び立つ。2時間あまりで仁川(インチョン)空港に到着。東京大学の中山裕之先生が先に到着し待っていてくださった。インチョン空港は最近できたと見えて、大変近代的で美しい。バスで会場のヒルトンホテルに向う。道路は整備され車が多い。看板はほとんどハングル文字で何が書かれているか想像もつかない。教会の十字架がやたらと目につく。

10月24日ホテルで朝食の後、タクシーでソウル大学に向う。2年前にキャンパスが移転新築され、大変立派である。病理学助教授の金大湧(キムデヨン)先生に会う。教室や実験室を案内してもらう。教室では学生が熱心に授業の予習をしていた。校舎にはゴミ一つなく大変清潔である。助教授室に戻って、アジア獣医病理学会の次期開催について話し合う。今回は今年の秋、韓国済州島で韓国獣医学会の開催に合わせて行くことになりそうだ。中山先生が早速、英文で議事録をまとめて、今回の記録とした。これを慶尚(キョンサン)大学校の金順福(キムスンボク)教授にメールで送ることにした。

昼食は焼肉屋で、早速骨付きのカルビをごちそうになった。サイドディッシュとして、各種のキムチや刺身、サラダ、生蟹、などがいっぱい並んでいてびっくりした。ウエイトレスが焼肉をはさみで手際よく一口大の大きさに切ってくれる。鉄板もこげだしたら何度でも交換してくれる。赤くない水キムチが珍しかった。その水もスープのようにスプーンで飲む。さっぱりしておいしい。

ソウル大学のセミナー室で10名程度の大学院生に「牛白血病の新しい分類」について講演を行った。通訳は朴在鶴(パクジェハク)さん

で、実験動物学の助教授である。北海道大学比較病理学教室に留学して韓国出血熱で学位を取得された先生で旧知である。私の講演を日本語から韓国語に通訳してくださった。セミナーの後、彼の実験室を見せてもらったが、実験動物として魚を飼育して、遺伝子組み替えの実験をしていると言う。なるほどマウスを使用するより魚の方が安く実験ができるわけだ。

3時からアジア獣医師会連合の大会(FAVA)の開会式が始まった。司会は何と朴龍浩(パクリェウホウ)教授であった。彼はソウル大学の細菌学の教授であるが、私のアメリカ留学中、1年間同じ研究室で家族ぐるみでお世話になった仲である。大会の参加者は1,200人程で80%が韓国人、その他がアジアからの参加者である。日本からは50名程の参加ではないだろうか(写真1)。開会式に引き続いて歓迎レセプションが開かれた。バイキング形式で美味しい韓国料理の数々を堪能した。

歓迎会の後、夜遅くなったが、朴在鶴先生が仁寺洞(インサドン)を案内してくれた。盛岡の材木町通りとよく似た韓国の伝統的な陶器や書画などを売っている小路で、記念に蓋付きの湯飲み茶碗を購入した。茶碗の中に陶器製の茶

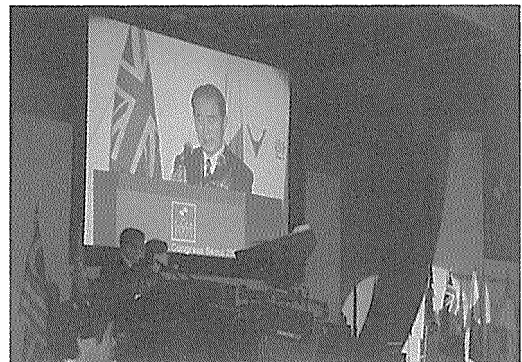


写真1. 開会式

2004. 10. 25

漉し器がついていて、韓国風の渋い模様が描かれている。次に大きなデパートに案内された、深夜というのに若者であふれている。韓国人はお洒落である。そのセンスもたいしたものだ。明洞（ミョンドン）の屋台で芋焼酎と肴に鶏の紅葉（足の革）を料理したものと海藻スープをいただいた。25度の強いアルコールにスープが良く合った。

学会ではBSE、高病原性鳥インフルエンザ、SARSのシンポジウムを聞いた。イギリスのDr. D. Mathews博士がBSEの講演をした。その中で興味深かったのはプリオンを実験的に感染させた6ヵ月の子牛の回腸をマウスに接種したところ、回腸に感染性が認められたというものである。これはプリオンが回腸に存在することを証明し、プリオンの侵入門戸として大変興味深い実験結果である。午後からはBSEのセミナーに参加した。韓国ではまだBSEが発生していないが、韓国の緊迫している事情、アジアの事情などを知ることができた。OIEの小沢義博先生もパネラーの一人としてお話された。

岩手大学の品川邦汎先生は「日本における動物食品の安全管理」の講演をされた。また岩手大学卒業生の田原研司さんは島根県で発生した鳥のオーム病について、鹿児島大学の浜名先生は和牛の奇形について、ポスター発表をされていた。北里大学の川村先生は乳牛の栄養について口頭発表された。徳島県の中川迪夫先生にも思いがけずお会いできて良かった。

学会終了後、韓国の南部にある晋州（ジンジュ）の慶尚大学校を訪問した。ここには韓国獣医師病理学会長の金順福（キムスンボク）先生が居られるので、ソウルで行った交渉を報告するのが目的である。なんと先生はこの大学院の院長で、いきなり大学の院長室に案内されてびっくりした。ここでは3年生の学生にソウル大学と同じ「牛白血病」の講義をした。高度な質問があり嬉しかった。講演の最後に岩手大学の学生のスライドも写すと、大変、親密感を覚えてくれた。

講義の終了後、学生が晋州城を病理の案内してくれた。ここは韓国が加藤清正の時代、日本と戦った場所である。韓国は結局日本に負けるのであるが、日本が祝宴をあげているとき、あるお酌の女性が侍の一人を泥酔させ、彼に抱き着いて、川辺に誘い、岩の上から水に飛び込み、その日本の侍を殺したという（写真2）。女性は抱き着いた手が離れないように5本の指に5個の指輪をはめていたという。韓国人にとって胸のすく場所なのだ。私達日本人がこれまで韓国に何をなしてきたか歴史を知らなければならない。

日本人もせっかちだが、韓国人はそれ以上である。エレベーターもさっと乗らないとドアに挟まれてしまう。ソウル市内の地下鉄は発達している。子供達は年寄りを敬い、車中でも席をさっと譲ってくれる。向側の席の小学生が英語で書かれた分厚い教科書を広げていた。小学4年生から英語を習うという。韓国の人は皆英語の会話が上手で、日本の英語教育方法も考えなければならない。携帯電話は日本と同様発達している。日本では車内での携帯電話の使用が禁止されているが、韓国では、まだ禁止ではないらしく、大声で話す人が目についた。大会の講演中も、携帯に電話がかかってきたとき、室外に出ないで小声で話す人がいたのには驚いた。

韓国は日本から最も近い国である。私達は悲しい歴史を乗り越えて、韓国をもっと知り、交流しなければならないと思った。



写真2. 晋州城 リレーフ 女性が侍を川へ

寄稿

モロッコを訪ねて

岡田 幸助*

私の長男は青年海外協力隊員でモロッコに赴任している。「協力隊を育てる会」の主催で、2001年10月9日から19日まで「協力隊活動視察の旅」が企画され、私たちも参加を申し込んだが、残念ながら米国同時多発テロの影響で中止されてしまった。そこで自分たちで勝手に視察の旅に行くことにした。

12月30日 モロッコの第一印象

21:55成田発のエールフランスで旅は始まった。妻と長女（北海道在住）、次男（東京在住、大学生）も同行する。パリ経由で、31日11:30首都ラバトに到着した。

どんよりした天気でもロッコの季節は雨期であることを知った。ラバトの土地は赤い土からなる。国土は日本の約2倍、人口は2,762万人という。長男が出迎えてくれた。会うのは1年ぶりだが元気そう。空港の出口ではポーターが勝手に荷物を運び、チップをせびる。空港からタクシーで汽車のラバト駅へ行く。タクシー運転手の中には言葉の意味が分からなくても出発するのがあるという。タクシーは定員オーバーではあるが5人とも乗せてくれた。道端には赤紫のブーゲンベリアが咲き、シュロの木が植えられている。汽車でケニトラへ。車内は割りときれいで、椅子のクッションも良い。スカーフをかぶった女の人、長い服を着た男性をよく見かける。約30分でケニトラに到着した。

ケニトラ駅の正面からまっすぐ伸びる広い通

りを、日本からの食料品のぎっしり詰まったスーツケースをゴロゴロと引きずりながら彼のアパートに向かう。道にはゴミが沢山散らかってきたくない。

彼の住居はアパートと言うより、日本で言えば高級マンションのようである。エレベータで5階まで上がる。3LDKに、バスルームともう一つ別にトイレがある。要するにトイレが二つもある。台所は広く、2カ所にバルコニーがついている。台所に続いたバルコニーは洗濯物の干場に利用していた。部屋の天井が高く、床は大理石様のタイル張り、日差しを避けて南側には窓をとらず、東西に窓がある。窓には日よけのブラインダーが備えられている。室内はひんやりとして寒い。ストーブをつけてもあまり暖かにならない。家賃は2,800DHまで認められているそうだ。ちなみに通貨はディラハムで1 DH=12円である。



電柱の上のコウノトリの巣 ケニトラ

* 岩手大学支会

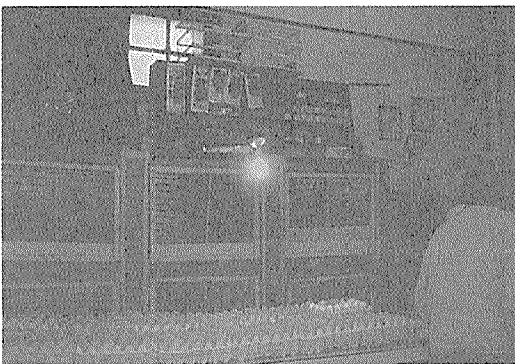
1月1日 ケニトラの町

日本から持参した食材で、雑煮とおせち料理まがいの食品をならべて朝食を取る。一家揃って、水入らずの正月は何年ぶりのことであろうか。

早速、ケニトラの市内を見物。むしろ室外の方が暖かく、歩くと汗が出る。まず市場に案内してくれた。野菜や果物を売る店、馬肉を売る店、牛肉を売る店、羊肉を売る店、それぞれ別々で、その店頭には馬や牛など動物の絵が書いてある。鶏は生きたまま売っていて、頼むと殺してくれる。魚屋さんでは魚が豊富に並べられている。ちょっと匂いが気になった。道路にはもちろん自動車も沢山走っているが、ロバや馬に引かせた馬車も多数見かける。動物の栄養は良くないようで、いずれも痩せている。町の道には至るところに路に面してカフェがあり、平日の日中でも、男達がお茶を飲みながらおしゃべりをしたり、道行く人を眺めている。私たちを中国人と間違えて「チェーン」とはやし立てる。息子は気に障ったらしく、抗議に立ち向かった。彼らは大部分、ベルベル人で、アラブ人とは、顔つきがまた違う。

昼食にはタジンを食べた。厚手の陶板の皿に羊や牛肉とジャガイモ、ニンジン、タマネギなどの野菜を入れ、円すい形の陶器の帽子をかぶせて、そのまま火にかけて煮たもので、香辛料が効いていて大変おいしい。

イスラム教でありながら酒も売っていて、鉄



鶏屋 鶏は生きたまま販売している ケニトラ

の扉の内側のバーで飲めるようになっている。同じイスラム教国でもこの国では多少融通が利くようである。歩いているといつの間にか旧市街に入っていた。物売りが多く、大変にぎやか。乞食も多数いるが、そんなにしつこくはない。イスラム教では富めるものが貧しい者に喜捨(バクシーン)を与えるべきであるという教えがある。モロッコの乞食は多少裕福なのかもしれない。一月の給料は高給の人でも2万円ぐらいという。

1月2日 マラケシュの雑踏

4時に起床して、5:55の汽車でマラケシュへ行く。汽車はコンパートメントに分かれていて、定員8人。両面の壁には鏡が張ってあり、座っていても頭上の荷物が盗まれないように見張っていることができる。車窓から羊や山羊の群れを多数見かける。羊達はわずかしかない短い草を探っていた。数日前に洪水があったとおぼしき跡があった。畑の境にはサボテンが植えられていて、羊が入らないようになっている。

11:30マラケシュ駅に到着。まずホテルに荷物を置きに行く。ホテルで昼食を取り、市内観光。町は車やオートバイが多くてやかましい。バスは一人3DHで日本のバスより一回り大きい。運転手に料金を払ったら、横棒がぐるっと回転して、一人づつ入れるようになっている。

旧市街は城壁カスバで囲まれている。まずクトービアの塔を見物。イスラム教の立方形の塔で高さ65m、下はモスクになっている。ジャマ・



洋品店 マネキン人形は首つり状態 ケニトラ

エル・フナ広場に行く。広場では、目の前でオレンジをまるごと絞ってくれるジュースを飲んだが、大変おいしい。蛇遣いや、手の甲に魔よけの絵（ヘンナ）を書いてくれる人がいた。旧市街スークには革製品、陶器、食品、金属器などを売る色々の店がひしめいていて迷路のようである。言葉はアラビア語かフランス語で、英語はあまり通じない。息子はアラビア・フランス語のどちらも不自由なく、値引き交渉など引き受けてくれた。妻がカフタン（襟無しの長い服）とジュラバ（フード付きの長い上着）を購入したが、最初1着で450DHといていたものが、2着で200DHに負けてくれた。市場の雰囲気は和やかで、身の危険は感じなかった。

次に革なめし工場を見る。子供が案内してくれたが、後ですっかりチップを取られた。革独特の異臭が漂い、とても異様な光景である。土産物店でこの国の砂漠で見られる砂の結晶であるデザートローズを購入した。博物館とベン・ユーセフ・マドラサ神学校を見る。この神学校は1956年まで使用されていたという。イスラム教は偶像礼拝が徹底して禁止されているので、神様の絵や像、もちろん十字架のような象徴も一切無い。その代わり幾何学的な模様が非常に発達し、モザイクや組木などは緻密で非常に美しい。礼拝堂のメッカの方角を向いた窪みはミハテブといい、特に美しく飾られている。夕食には中華料理店へ行った。



革なめし工場 独特の異臭が立ちこめる マラケシュ

1月5日 首都ラバト

タクシーでラバトに行く。モロッコは王国である。1999年ハッサン2世が亡くなった。ハッサン2世の父親ムハマド5世の美しい霊廟を見て、旧市街メジナで魚のフライを食べる。魚は非常に新鮮でおいしい。ウダイヤ庭園は海を見下ろす景色のいいところで、カフェでモロッコのお菓子とミントティーをいただいた。午後からシェラを見学した。ここはローマ時代の遺跡で、円柱や石の床が残っている。そこかしこに色々な種類の花が咲いていてとても美しい。よくヨーロッパの庭園で、ローマ時代の円柱や石像を庭にあしらっているのは、欧米人がこのような風景にあこがれているからなのだと納得した。

15時からJICAのY専門家のお宅を訪問した。庭付き1戸建ての豪邸ともいえる高級住宅で、地下室や庭には噴水付きの池もある。住み込みの若い男性の庭師がいて、きれいに手入れされている。Yさんからお聞きした話であるが、この国では新鮮な魚は沢山取れるが、それを加工するアイデアが無いという。従って、カマボコ、干物などはこの国に無い。この国は三輪車一つ作れない。町を走っている車はすべて輸入品である。この国の発展のためには一次産業だけでなく二次産業を発達させたほうが良いという。

帰り道マルジャンスーパーで買い物をした。ここは日本も顔負けの大型スーパーで、食品・日用品など何でも売られている。イスラム教国でありながら、お酒や、豚肉製品が堂々と売ら



屋台で売られている羊の脳 マラケシュ・フナ広場

れているのにはびっくりした。またそこには沢山のモロッコ人が来ており、その購買力のすぎまじさに驚いた。海外から援助を受けているモロッコの、どこにこんなにお金持ちがいるのだろうと不思議であった。

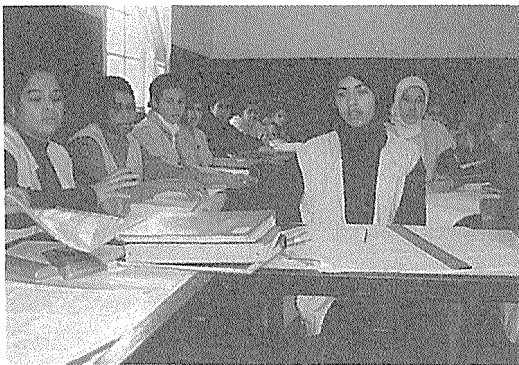
1月6日 古都フェズ

汽車で1,000年以上も前から存在する古都フェズへ行く。駅からタクシーでブージュールド門まで行った。メディナの迷路は有名である。マラケシュのそれと比べて、坂道が多くより複雑である。男の子が案内しようとしつこくつきまとう。長男がコツンとやるとやっと離れていった。ロバが荷物を運ぶ唯一の手段。ここで陶器製の石鹸箱を購入した。美しい模様が描かれている。

帰りの汽車のコンパートメントで見かけたことだが、赤の他人でも助け合って荷物を上の棚に乗せてあげていた。また知らない者どおしでも実の祖父と孫のようにおじいさんが小さな子供をあやしたり、誰彼と無く自分の食物を分け合ったり、初めて車内で会った男女が昔からの恋人のように話しあったりしていて、モロッコ人の「人の良さ」を見ることができた。また町の中では車イスに乗った障害者の方を多数見かけた。それだけ障害者の人たちが外に出易い「いい国」なのだと感じた。

1月7日 アルミナ女性の家

いよいよ息子の職場を見学した。長男は青年スポーツ省ケニトラ支局アルミナ女性の家でシ



洋裁のクラス ケニトラ・アルミナ女性の家

ステムエンジニアの協力隊員として働き、コンピュータを教えている。

いわば職業訓練学校で、ここには情報科、被服科、洋裁科、刺繍科などがあり、高校を卒業した女性が学んでいる。履修年限は2年間である。各クラス数十名ずつ計177名が在籍している。私たちが見学するというので、テスト期間にもかかわらず全生徒が招集されていた。月謝は60~150DH。この月謝が払えなくなって退学する生徒も少なくないという。残念ながら卒業後、職に就ける生徒は少数であるという。女性の校長先生以下十数名のスタッフから成る。情報科の学生は10数台のパソコンを囲んで1台に2人ずつ、おしゃべりをしながら勉強していた。

また付属幼稚園（5、4、3歳児の3クラス）がある。日本の幼稚園と変わらない風景であるが、幼稚園の子供たちはフランス語も学ぶ。

1月8日 帰国して

カサブランカ空港から帰国の途へ、1月10日無事、日本の我が家に着いて感じた事は、テレビが鮮明であること、風呂でお湯がふんだんに使えること、家の中に物が多すぎることである。

その後、彼の学校で撮影した写真を人数分焼き増して、モロッコに送った。1週間もしないうちにメールで礼状がきた。「今日、写真を受け取りました。みんな喜んでいました。カメラを持っている家庭はそんなに多くないので、めずらしいんです。」と。

今回の旅行をとおして、息子が赴任前よりも何倍もたくましくなり、元気で現地の人と解け合って勤務している姿を見ることができたことは何よりも喜びであった。

学会見聞記

「綿羊と山羊の病気と生産性のための国際学会」に参加して

—綿羊と山羊の国ヨルダン—

岡田 幸助

ヨルダンへ

現在、国際協力事業団JICAのシニアボランティアでヨルダン科学技術大学の病理学の専門家をなさっている酪農学園大学元教授松川 清先生から1通の手紙をいただいた。それによると、アラブの国は豚を食べないので動物蛋白源として綿山羊を主に摂る。遊牧民のベドウィンが細々と飼育しているだけではヨルダンの需要を賅えず、その大部分を輸入に頼っている。在来種がほとんどで、飼養管理の粗放なことから相まって生産性は高くない。そこでヨルダンでは国威発揚の一貫として「綿羊と山羊の病気と生産性のための国際学会」を開催するので、是非日本からも来て発表をして欲しいというものがあった。私は以前「山羊関節炎脳炎ウイルスによる山羊の関節炎」について研究していたので、これを発表することにして、治安に少し不安もあるが行く決心をした。

1999年10月20日夜、成田を出発した。13時間で飛行機はバリのシャルル・ド・ゴール空港に到着した。空港の外は真っ暗で、深い霧に覆われていた。空港でしばらく時間を潰し、昼の飛行機でド・ゴール空港を出発し、夕方首都アンマン空港に到着した。さすがアラビアの国で空港のビルの窓もアラビア風の曲線で縁取られている。

空港では松川先生とJICAの調整員の出迎えを受けた。ホテルに向かう車内で調整員の中川さんからヨルダンの説明を受けた。国の広さは日本の北海道程度である。人口は660万人。ヨ

ルダンは石油が一滴もとれない。産業は肥料の国である。リン鉱石やカリ塩が採れるのだそうである。日本はこれまでに17億ドルの援助をしているという。宗教は主にイスラム教のスニ派で、キリスト教徒も7%いる。官庁、大学は木・金曜日が休みで、大使館は金・土曜日が休みである。車はウインカーを出さないで運転には注意すべし等々。私はアンマン市内にあるアマラホテルに落ち着いた。ホテルでは長旅の疲れが出て一晩ぐっすり眠った。まだ暗いうちから闇のなかをコーランの朗読の音がスピーカーで町中に響き渡った。

開会式と大学

アンマンの町は思ったより立派なビルが建ち並び、そのデザインも斬新であった。昔の名前はフィラデルフィアという。地面の土はどこも山土が崩れたようなごろごろした赤茶色ないし白色で、雨が少ないせいか、殆ど草も生えていない。これを礫砂漠というそうである。しかし、所々植林しているところがあり、緑化に努力している跡がうかがえた。石油缶に植物の苗を植えている家もあった。大学はアンマンから北へ90km、車で1時間半程のイルビットという街にある。大学キャンパスは1,100ヘクタールあり、非常に広い。大学は1986年に創立で、9学部、400人の教職員と800人の学生がいる。大学の建物は日本の丹下健三氏の設計になるという。開会式は大学の講堂で開かれ、アリア王女もみえていた(写真1)。開会式は全員起立して、国歌の後、コーランを読み、始まった。学部長、学長が挨拶した。この国は立憲君主制で正式にはヨルダン・ハシミテ王国という。1946年ヨルダンはイギリスの委任統治から独立した。昨年の1998年フセイン国王が亡くなって、その長男が国王となった。町や大学の至る所に前国王と

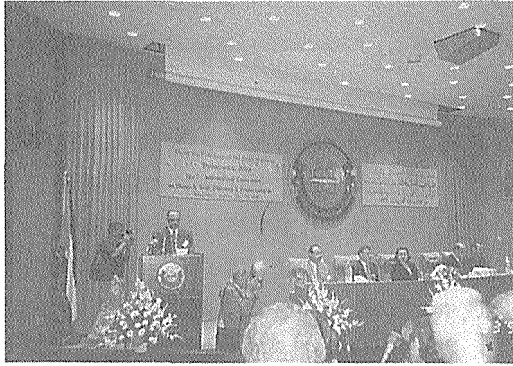


写真1. 学会開会式 壇上中央の女性がアリア王女

その皇太子、即ち現アブドラ国王の写真が飾られていた。開会式の後、VIPルームに案内され、お茶の会が催されたが、そこで王女とお会いした。非常にふくよかな優しいお人柄であった。大学は非常に清潔で、落書きやビラ等いっさい無い。トイレで足を洗っている学生を見た。お祈りの前に身を浄めるためである。校舎にはお祈り専用の教室がありそこで10数人の学生が、立ったり伏せたりして熱心にお祈りしていた。倫理観と宗教観の行き届いた学生達であった。

学会のようす

学会の参加は31カ国から300人程度であった。ヨルダンを除いてトルコからの参加が一番多く、イスラエル、イラン、イラク、シリアなどアラブ諸国、エジプト、ギリシャ、アルジェリア、モロッコ、ボスニアヘルツェゴミナ、チュニジアなど日頃あまり交流の少ない国の人とお会いすることができた。もちろん、アメリカ、ドイツ、フランス、イギリス、スペイン、イタリア、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、ノルウェー、オーストラリア、インド、パキスタン、マレーシアなどからの参加もあった。アラブ諸国は本当は仲がいい。イランの人もイラクの人も来ていたが大変親密に談笑していた。仲が悪いと宣伝しているのはアメリカ寄りの情報である。ましてテロリストの国等というのは誤解も甚だしい。綿羊は毛や肉を利用することでその

有用性が分かるが、山羊の利用方は何だろうかと思っていたが、山羊の乳から美味しいチーズができるのだそうだ。古代から遊牧民は綿羊と山羊を乳、チーズ、ヨーグルト、肉、衣服に利用してきた。山羊の皮は水筒となった。黒い山羊の毛は丈夫な布に織られ、天幕とされた。羊毛は紡いで織られ、外套や上着となった。綿羊と山羊はまた神殿でいけにえとして殺された。綿羊も山羊も自然のままの丘陵の放牧地に良く適していた。羊飼いは綿羊と山羊の混ざった群れを世話をし、野生の動物からその群れを守り、新鮮な牧草のある所や水飲み場へと導いた。山羊と綿羊の病気で演題が多かったのはキャンピロバクター、ブドウ球菌、リステリア、パストレラ、クロストリジウム、大腸菌、ブルセラ、マイコプラズマ、クラミジア、乳房炎、流産、寄生虫症、口蹄疫、マエディ・ビスナ、山羊関節炎脳炎ウイルス、狂犬病、肺腺腫などである。私はエイズウイルスと同じ仲間の山羊関節炎脳炎ウイルスを接種した山羊の免疫学的研究をポスターで発表した。このウイルスは山羊に人の慢性関節リュウマチと同様の病変を作り、医学からも注目されている。また若齢では脳炎を作る。

学会のプログラムは一応決まっているが、変更が多く、直前まで予定が決まらないのがこの国の常のようである。松川先生によると大学の牧場の羊がヨーネ病に罹患しているが、大学の人にはその病気の恐さに対する認識が無いと嘆いておられた。また山羊の脳幹部にグリア細胞の増殖があり、私の発表する山羊関節炎脳炎ウイルスとの関連を心配しておられた。その他、鶏の産卵鶏が産卵しはじめる少し前の年齢になって骨髓球症で5,000羽飼育中半数が死亡したという。近年、日本を含め世界中で鶏白血病ウイルスのJ亜群が問題になっているが、そのウイルス汚染はこのヨルダンでも広がっていた。

獣医学部は1990年に創設され、アラブ諸国の中で最高レベルの獣医大学としての自負を持つ

ている。基礎獣医学講座と臨床獣医学講座および家畜病院からなり、教授7、助教授8、講師2、助手1人のスタッフがいる。学部教育は5年制で1クラス25~40人である。修士課程は2年で家禽、外科、食肉乳製品衛生、病理、内科、微生物を学ぶ。研究室は組織学、微生物、寄生虫、衛生、臨床繁殖、生理薬理、生化学、栄養、病理、臨床病理、標本室、剖検診断室からなる。研究テーマとしては、ブルセラ症、トキソプラズマ症、創傷性胃炎、乳房炎、肺炎、マイコプラズマ症、リステリア症、薬物評価、第四胃変異、不妊症、放牧病、ラクダの病気、乾酪性リンパ節炎などである。女子学生は宗教上の理由からスカーフで髪を隠している。顔を隠しているわけではない。非常に目鼻が整っていて、スタイルも美しい。学生達は自由に明るく男女交際している。学生の服装も昨今の日本の若者から見たらずっときちんとしている。松川先生によるとヨルダンの学生は非常に勉強に熱心で積極的であるという。これは授業料が非常に高いことに原因しているようだ。町では女性をあまり見かけなかった。貞操は非常に厳格で、もし娘が犯されたら、親は男の方でなく、自分の娘を殺してしまうそうである。

ヨルダン北部

学会のプログラムは毎日3時過ぎに終了し、夕方、近隣の遺跡等を案内してくれた。大学のバスに乗ったが、窓には毛布のような厚いカーテンがされていて、夏の暑さがしのばれた。まず近くのジェラシュに案内された。古代ローマ時代の都市で、旧約聖書ではゲレサという名前で登場する。石作りの大きな劇場や神殿の遺跡に感激した。遺跡近くのレストランで夕食になったが、食事が出てくるまでなんと2時間も待たされた。食事は薄い直径30cmほどの大きな円形のホブスというパンにホモスという豆のペースト状のものをつけて食べるのが基本で、そのほか鳥肉や羊肉の料理、オリーブ油やヨーグル

トをかけたサラダがよくでた。禁酒の国でアルコール類は飲むことが出来ない。ただしホテルでは注文すれば飲むことも可能だ。アラクという焼酎のようなブドウから作った強い酒は独特の臭いがして、レモンを入れると白く濁る。

学会後、ヨルダン北端の町ウムカイに案内された。遠くに聖書によく登場しイエスの活躍したガリラヤ湖、紛争問題が起きているゴラン高原が見えた。そこの遺跡のレストランで夕食を食べたが、やはり出てくるまで2時間近く待った。

大学標本室

学会最終日にヨルダン科学技術大学のキャンパスを案内してもらった。一番驚いたのは標本

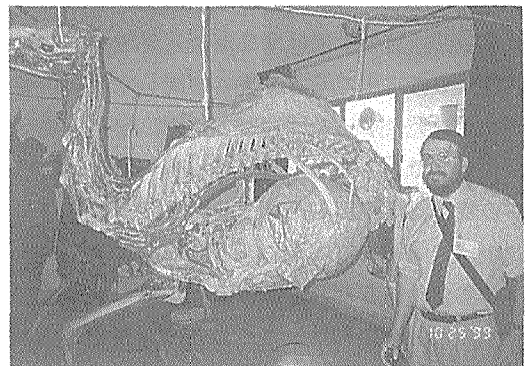


写真2. ラクダの乾燥標本
瘤の中に固まった油が入っている。
左は米国のSchallberger博士



写真3. 山羊の乾燥標本
しっぽが上を向いているのが山羊で、
羊は下っている。

室で、馬、ラクダ(写真2)、山羊(写真3)、綿羊を解剖してそのまま乾燥した標本にはびっくりした。放血しながら特殊な固定液を頸静脈から注入し、その後乾燥させ、血管には色を付けるようである。非常に立体的でこのようにすれば学生も解剖学が理解しやすいであろう。ラクダの瘤の中にはチーズのような固まった油が入っていた。午後からイルピットの街でショッピングをした。町では大きな肉の塊を串に巻き付けぐるぐる回しながら、バーナーであぶり、ナイフで削いで、それをホブスにくるんで食べるシャワルマという食べ物を売るスタンドを見かけた(写真4)。看板や道路標識はアラビア文字だらけで、もし私が皆からはぐれたらどうしようかと心配になった。アラビアの文字は右から左に読む。しかし数字だけは左から右に表記する。通貨の単位はヨルダンディナールと書いて聖書に出てくるデナリと同じである。1ヨルダンディナールは148円程度である。プールサイドで「さよならパーティー」があった。この時も料理が出るまで2時間も待たされた。おかげで同じテーブルに座ったトルコやスペインの学会参加者とお互いの国について色々話しをすることが出来た。

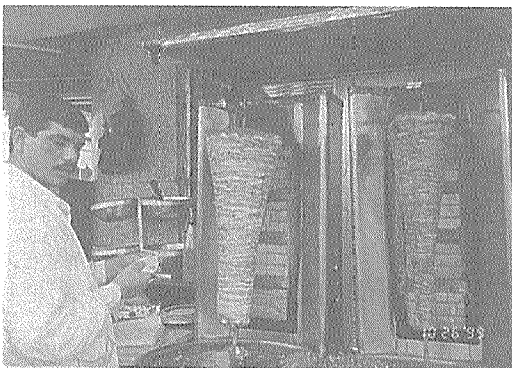


写真4. シャワルマ

ヨルダン南部

学会終了後30人ばかりの学会参加者でバス2台を連ね、ヨルダンの南部方面に旅行をした。

集合時間は朝6時だと言う。前日の深夜にホテルに戻り、次の日の早朝6時に集合してバスに乗るのはとても辛い。私はその時間に集合したが、皆が乗ったバスが来たのは2時間後、時間が守れないのがこの国の特徴だろうか。バスはまずカラク城に着いた。十字軍の時代の城で、砦が印象的であった(写真5)。土地は乾燥していて殆ど草も生えていないが、石垣のすき間に、かわいいタンポポのような花が咲いているのを見つけた時はかわいらしく、ほっとしてうれしかった。レストランで聖書に出てくる「2匹の魚と5つのパン」のモザイク画を写した絵皿と羊を抱いているキリストの像を購入した。至る所で綿羊と山羊の群れを見た(写真6)。綿羊と山羊は茶、黒、白と色々混ざっている。綿羊や山羊は体質が強健で疾病に対しても抵抗力が強く、草もわずかしか生えていないような



写真5. カラク城

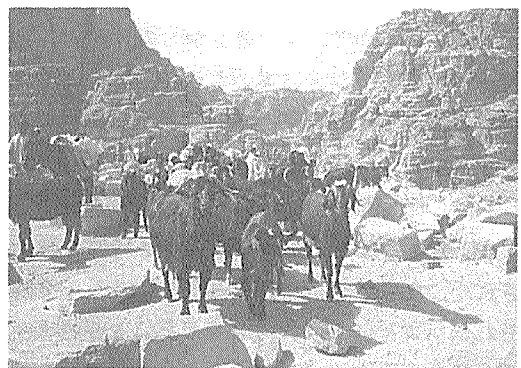


写真6. 黒い山羊の群 ペトラにて

容易に飼育できる。また繁殖力も旺盛である。時には乳牛の放し飼いもみかけた。また学校へ行く小学生をみて、日本と変わらぬ子供たちの無邪気さにほほ笑ましかった。道端では壺を並べて売る人がいた。

海拔マイナス394mの世界で最も低い地点にある死海に寄った。死海は塩分濃度が50%以上で泳げない人でも沈まないという。死海の湖面には塩の塊が浮いていた。私どもが立ち寄った岸は、ぬかるんでいて湖面の水の触れるところまでは行くことが出来なかった。バスには無数のハエが飛び込んできて往生した。

夜、アカバについた。町の肉屋では羊の皮をむいた丸ままの体がぶら下げてあった。ある店ではガラスで囲ってあり、その内側が低温になっている。店番の人は全て男性で、女性は殆ど見ない。店でこれから行くペトラの日本語案内書、歯磨きペースト、そしていつも外国を訪問した時に記念として買っているその国の国旗、即ちヨルダンの国旗を購入した。アラブの人たちは本当に気さくで親切である。道に迷ったとき、道を人に聞くと、親切にも私が分かるところまで付いてきて案内してくれた。治安も非常に良い。その証拠にホテルや店には鉄格子が無く、ロビーに鞆を置き放しにしている、数時間後

そのまま残っていた。私がこれまで訪問した外国の都市ではどの店のショーウィンドーにも頑丈な鉄格子があり、この国のようにガラスがむきだしというのは考えられないことである。

ヨルダンの男性は一般にシャイで、物静かで、遠慮深い。男性は鼻の下にちょぼ髭をはやし、眉も濃く、色黒で体格も大きく、怖そうに見えるが、実際はとても優しい。彼らの楽しみは会話で、宗教上の理由で酒も飲まないの、井戸端会議を良くやっている。大の男が道端でたむろしているのは気味が悪いが、おしゃべりすることが彼らの楽しみなのだ。また水たばこも大好きである。

朝、海岸を散歩した。対岸はイスラエルで、家々がはっきり見える(写真7)。外国をこんなに近くで見るとのは奇異な気がする。午前中にアカバ城と水族館を見学した。水族館は大学付属の施設で、美しい魚やイソギンチャクのような海洋生物が印象的であった。時間があつたので、ボートに乗った。ボートの底はガラスの窓になっていて海底の魚が良く見えるようになっている。午後から映画アラビアのローレンスの舞台になったワディラムを訪問した。真っ赤な岩山と砂漠、そこにラクダがいて絵の様であった(写真8、9)。夜、ペトラの宿に到着した



写真7. アカバ湾に並んだ各国の学会参加者。
対岸はイスラエル



写真8. ワディラムのラクダ



写真9. ワディラムのラクダ使いの人達

が、このままのんびり旅行を継続すると、帰りの飛行機に乗り遅れると言う人たちがかなりいて、明日の予定でもめた。翌日、ヨルダンでこれだけは見逃せないというペトラに行った。ペトラは2,800年前のナバティア人の遺跡で、巨大な岩肌にエジプト・ヘレニズム様式の神殿や、住居を彫っているのは見事であった。我々は2000年後にどのような遺跡を残すのかと、思いを巡らした。

日本に対するイメージ

私達がヨルダンを知らないと同様に、ヨルダ

ンの人も日本のことが分からない。彼等が日本について知っていることといえば、TOYOTA, SHARP, CASIO, HITACHI, RICOH, KAWASAKI, CANONなど電器や自動車メーカーの名前で、日本をテクノロジーの国としてのイメージを持っている。私が日本人だと分かるとコンニチワ、ハジメマシテ、コンバンワのように声をかけてきて、日本に好感を持っていることが良く分かる。かつて上野公園などにたむろしているイラン人などを見て、私達は避けて通っていたように思うが、それは大変な偏見で、本当に申し訳なかったと思う気持ちで一杯である。

岩獣会報 (Iwate Vet.), Vol. 25 (No.3), 83-89 (1999).

資料

インドで感じたこと

岡田幸助

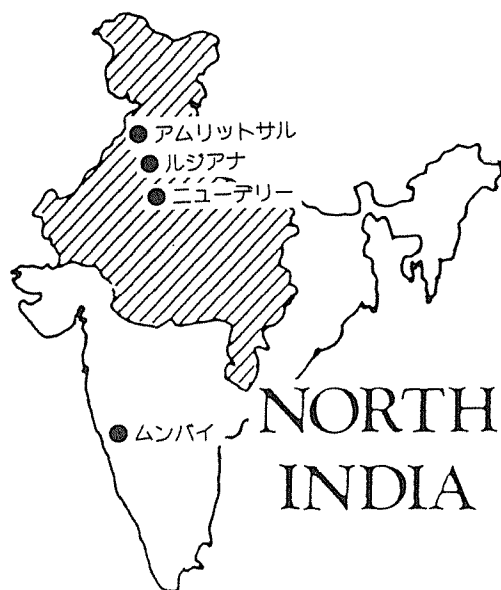
宿と交通

1998年11月7日～13日までパンジャブ州のルジアナ市で開かれた国際獣疫学会に出席した。パンジャブ州はインドの北西部のパキスタンと国境を接している州で、ニューデリーからルジアナまで320kmは列車で行くより仕方がない。深夜にニューデリー空港に着いたが、その夜の宿泊と翌日の列車に乗っていくのがこんなに大変だとは思わなかった。何が大変かは説明するのも難しいが、結論的に言うと学会本部の案内が不十分で、学会本部や下請けの旅行者から何の連絡案内もなく、空港の雑踏の中で皆これからどうすればいいのか途方にくれたということであろうか。私は出発前にe-mailでインドの学会本部と何度も確認したので、出迎えがあり、その夜ホテルで一泊してから早朝に自動車で出発し事無きを得たが、O先生一行は当日の宿がなくルジアナまで深夜バスで行かなければならなかった。A先生は学会本部にお金を納入していたにもかかわらず、汽車の切符が取れていなかった。これは学会本部からのe-mailによる問い合わせに答えていなかったためで、インドの汽車の座席指定を取るのには年齢と性別を知らせておかなかったからである。もっと悲惨なことに列車がキャンセルされていたのでA先生は来ないのだろうということで、ルジアナの宿もキャンセルされてしまっていた。S先生は何とニューデリーからタクシーを飛ばしてルジ

アナまで来た。料金はUS\$200というから、我々にとって決して高くはないが、ルジアナに着いた時には疲れ切った表情をしていた。後日、インドで生活している日本人にこのことを話したら、インドでは階級制度があり、物事をたのまれても自分でしないで下の身分の人にさせるからだという。人から人に伝わっていくうちに責任の所在が分からなくなってしまいうらしい。自分で出来ることは自分でする必要がある。

私の乗った特急列車について紹介したい。列車そのものは決してきれいではないが、日本の新幹線と同じ広軌で座席が2列と3列からなっている。新聞、お茶、スナック、食事、マンゴジュースのサービスもある快適なものであった。窓は2重ガラスで、これは寒さではなく暑さを遮るためであろう。2重窓の内側は汚れていて、汚れを拭きとることが出来ず、外が良く見えないのが残念であった。車内にはかなりの音量でインドの音楽が流れ、これもサービスのつもりだろうが少しやかましかった。トイレは日本では見かけなくなった垂れ流し式で、停車中には用を足すことが出来ない。

私のルジアナにおける宿は中級のバトラホテルで、山之内先生や小沼先生一行と同じホテルであった。浴槽はなくシャワーしか浴びることができなかった。シャワーからお湯が出ることになっているが滞在中遂に一度もでなかった。クーラーはききすぎで、ファンの音もうるさく、



寒いぐらいであった。弱くしようとしても調節がきかない。しかたなく風邪を引かないよう、寝る場所を風の当たらないところに移動した。

街で見たもの

インドの人口は9億4千万人で中国に次いで世界で2番目に多い。何処に行っても雑踏で、クラクションをけたたましく鳴らし、インド独特の臭いのする喧騒の世界であった。美しくサリーをまとった女性や、精悍な男性の他に、軍人のように見える警官、物ごいの人や身体に障害を持った人でごったがえしていた。信号待ちで停車したり、道路に立っていると、お金をねだる大人や子供が次から次へと寄ってくる。「靴磨きをさせろ」という子供は大変しつこかった。物ごいの人に小額を渡すと、満足せず「もっとくれ」と催促する。いつまでも何処までもつきまとってきて、辟易とした。年配の女性が1歳か2歳の子供を抱いて、この子に食べさせるためにお金をくれという。中には自分の子供ではなく、他人の子をレンタルしてもらって抱いていることもあるそうだ。もっと恐ろしい話を聞いた。インドでは乞食に生まれた子供は、一

生乞食で決して上の身分にはなれない。そこでその子供にとって実入りのいいように、子供の腕や脚を切り落とすこともあるという。ルジアナからの帰路はまだ夜も明けない早朝であったが、橋の上の石畳に毛布に包まって寝ているホームレスの人々を多数見て、寒いときはどうするのだろうと心配になった。

さてインドのトイレには一般にトイレトーパーが置いていない。便器の横に蛇口があり、指を使って尻を洗浄するようである。勿論一流ホテルのトイレには紙があった。

パンジャブ農業大学と国際獣医免疫学会について

インドで32校ある農業大学の中でパンジャブ農業大学(写真1)は一番大きな大学である。インドの農業大学のうち23校に獣医学科がある。パンジャブ農業大学は獣医学部、畜産学部と農学部からなりそこに53の講座があり、300人の教職員が教育に当たっている。学生数は学部生800人、大学院生371人である。獣医学教育の歴史は古く、1882年に現在のパキスタンにパンジャブ獣医学校が創設され、1942年に他の学部と合併してパンジャブ大学となったそうである。1947年のインド独立後、1962年に現在のパンジャブ農業大学に整備された。獣医学部には現在18の講座がある。講座名の中には倫理・法学講座もあった。構内は清掃が行き届いて清潔であった。不思議なことにゴミ箱があまりなく、ゴミ

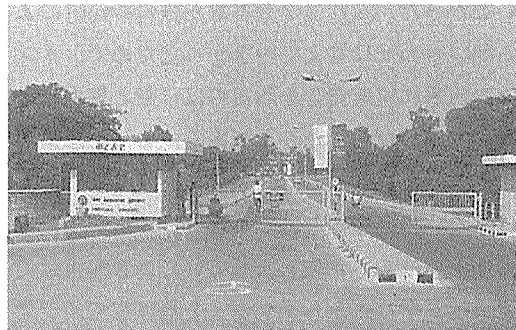


写真1. パンジャブ農業大学正門

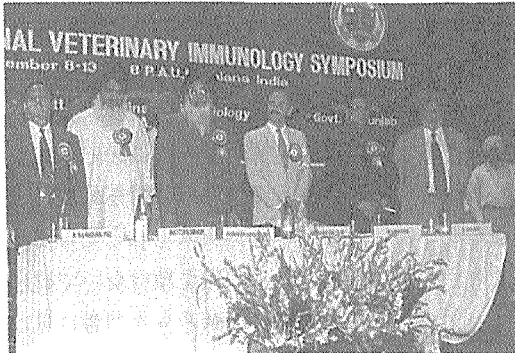


写真2. 国際獣医免疫学会開会式
左から3番目が州知事

の始末に苦労した。学会の開会式にはパンジャブ州の知事が来て挨拶をした（写真2）。銃を持った多数の警官による警護の中、参加者全員起立して出迎え、おびたしいマスコミが取材に来ていた。知事と言っても日本の知事とは比べ物にならない権力を持ち、一国の総理大臣にも相当する。従って、インドはアメリカと同様な連邦国家と見たほうがよいかもしい。

学会には世界20カ国から200人以上が集まり、インドの人を合わせると400人程度の出席であった。各種のシンポジウム、ポスター展示があり、特にサイトカインの研究の発展に目覚ましいものがあつた。ポスター展示の中から座長により数題が選ばれ、ワークショップとして口頭で発表をして、皆と論議した。日本人も殆どのワークショップで発表をして、日本のレベルが決して欧米から遅れていないことを証明した。日本人の皆が堂々と英語で討論をして、誇らしかった。ちなみに私も口頭で発表させられたが、これは私のセッションの演題が少なかったからである。学会に限ったことではなく、今回のインド旅行全体に感じたことであるが、インドでは非常に時間にルーズで、我々せっちな日本人にとっては耐えがたいことであつた。

食 事

飛行機、列車、レストランでまず尋ねられるのが、肉食主義か、非肉食主義かということ

ある。これは宗教上というよりも、肉食主義の方がステータスが上のように、肉食主義の人はえびついていた。ホテルの朝食はトーストと卵とコーヒーで、特に日本や欧米と変わりが無いが、昼食と夕食はいつもインド料理であつた。主食はチャパティーやナンで、前者はイーストの入らない煎餅の様なもの、後者はパンの一種と思えばいい。御飯もあり、味の付いたカレーチャーハンとでも言えばいいだろうか。副食は羊肉や鶏肉を様々な香辛料で料理されたものであつた。いわばカレーのルーに相当する。私は日本でもあまりカレーライスは好まないで、連日カレーばかりではやや食傷気味であつた。インドでは宗教上の理由から牛や豚の肉は食べることが出来ない。後で訪問したムンバイ駐在の日本人N氏は豚肉と牛肉が食べられないのは本当に辛いと言つていた。魚もあまりなく、シーフードは一般に高価であつた。

飲料水としては衛生状態が悪いのでミネラルウォーターしか飲めない。水が無料の日本は本当にありがたいものである。チャーイーというミルクと砂糖のたっぷり入った紅茶が乾燥した気候風土に合つて非常においしい。コーヒーはホテルでさえインスタントコーヒーで、レストランで注文するとお湯と粉が運ばれてきた。

パンジャブ州は禁酒の国で、ホテルでもビールは置いていない。外国人が飲むのは構わないので、ホテルの客室係りボーイが買ってきてまいらうかというので、いくらかと聞いたところ、80ルピー（240円）ということであつた。後日ホテルの前の酒屋さんで値段をみるとなんと40ルピーで、ボーイに倍とられたことになる。インド人は一般にしたたかたで、スキさえあればお金を高く吹っ掛けてくる。ホテルのカウンターでも同様のことがあり、私の前の人が高くとられたようで、支配人に文句を言い、ずいぶんトラブつていた。おかげで私のチェックアウトの

精算に1時間もかかってしまった。

シーク教と黄金寺院

パンジャブ州はシーク教徒の多い街で、皆きちんとターバンをしている。シーク教はヒンズー教から派生した宗教であるが、イスラム教の影響を受け、今日、日本でも有名になったグルが開祖した宗教である。神は一人で偶像を排する。カースト制を廃し、人類皆平等ということで、万人にシーク教の門戸が開かれている。従って、その総本山であるアムリットサル黄金寺院(写真3)に、我々異教徒も入ることが出来た。シーク教徒はイスラム教徒に襲われるのを防ぐために、一生髪を切らず銀の腕輪をして、パンツをはき、帯刀し、櫛を持つのが掟という。ターバンはシーク教徒の必須ではないが、髪をまとめるためにするのだという。見習いの若い人は頭の前の方でマゲを作っていた(写真4)。

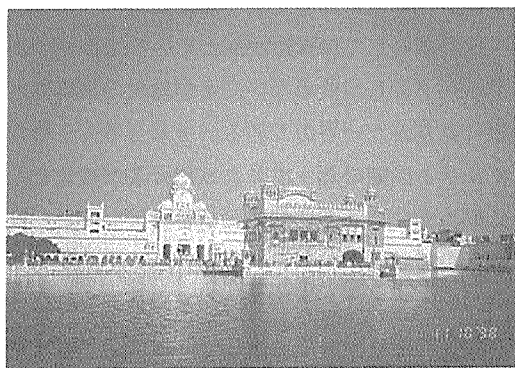


写真3. シーク教の総本山 黄金寺院



写真4. 沐浴するシーク教徒

寺院には素足で入り足を洗う、また頭には被り物をしなければならぬ。被り物はハンカチでも良く、私は帽子を被っていたので、それもOKであった。但し、裸足であればいいというのではなく、不浄なものを寺院に持ち込んではいない掟になっていた。実はそれを知らず、入り口が混雑していたので靴を預けないで鞆に入れていたが、槍を持った強そうな門番に見つけられてしまい、最初からやり直しになった。すなわち下足預かり所に靴を預け、足を洗って境内に入るのである。境内では中央の神殿の中で歌っている聖歌がスピーカーを通して流れ、冷たい大理石の床の感触も心地よく、信者にとっては天国にいるような気持ちになるのが納得できた。

黄金寺院の参道のすぐ横に、ガンジーのインド独立運動のきっかけとなったジャリアンワラー庭園があった。そこには大きな井戸があり、1919年4月13日、罪もない無抵抗の人民がイギリスのダイアー将軍に虐殺された所で人民はその井戸に飛び込んで死んだという。その数、死

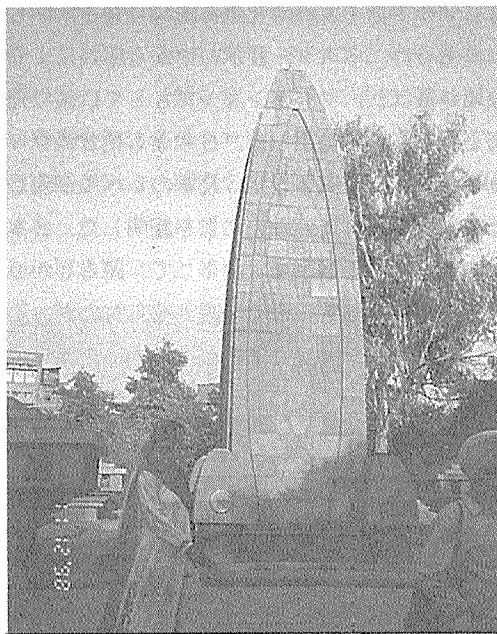


写真5. 虐殺事件の慰霊碑

亡1,000人、負傷2,000人という。そこには高さ20mもある、巨大な弾丸型のれんが造りの慰霊碑が建っていた(写真5)。前日、学会のエクスカージョンですぐそばまで行っていったのに我々を連れていってくれなかったのは、我々一行に含まれるイギリスの先生方に遠慮したのではないかと思った。

ヒンズー教と拝火教

インド人の8割はヒンズー教徒だという。ヒンズーはIndiaの語源であり、いわばインド教である。いくつかのヒンズー教寺院を訪れたが、4本の手を持つシバ神、青い顔をした神様(ヴィシュヌ神)や、像の鼻をした神様(ガネーシャ神)など極彩色の像が多数まつられ、それらの絵画が飾られていた。そこに描かれている物語が理解できればもっとおもしろいだろうと思った。ヒンズー教は一見多神教に見えるがそうではなく、一つの至高の存在への信仰で一つの神の多面性だという。「いくつもの川が、流れこそ違ってもやがて一つの大海に注ぐように、全ての宗教が目指すゴールは一つだ」という立場をとっている。信者は参道で買った花を盆にのせてそれらの像にささげ、僧から祝福を受けていた。またムンバイのエレファンタ島とカンヘリーにある2、3の石窟も訪れた(写真6)。1,500年以前の人が、岩を削り立派な僧院を作っ

ているのには驚いた。壁面には見事な女神や動物の像が刻まれていた。中央にはおまんじゅうのように見えるが、実は巨大な男根が本尊「リンガム」として祭られていた。

ヒンズー教徒は牛を神様の使いと思っているので殺すことが出来ない。従って街のいたるところで牛を見かけた(写真7、8)。街の中にはそんなに草もないので牛はゴミをあさっていたが、だれが餌をやるのだろうか。病気になったらどうするのか、心配になった。インド人に聞いてみたところ、ボランティアが餌をやっているのだそうだ。もう一つ心配があった。それは獣医大学でいかにして牛の解剖を教えているのか。血液にいるタイレリア原虫などの研究は

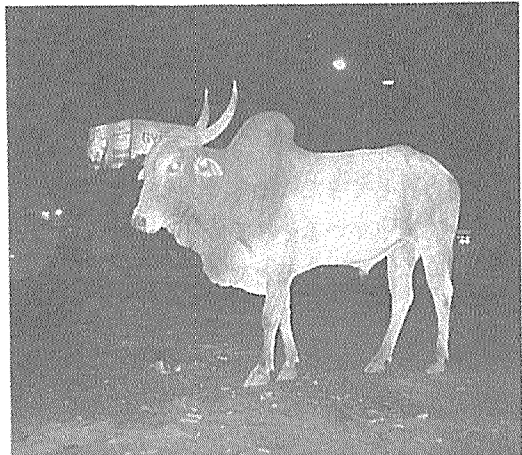


写真7. 白いコブ牛

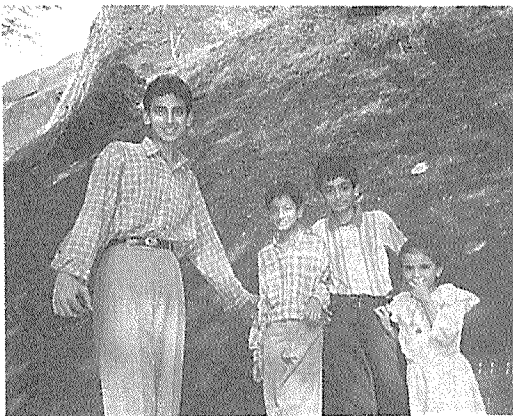


写真6. カンヘリー石窟で会った子供達

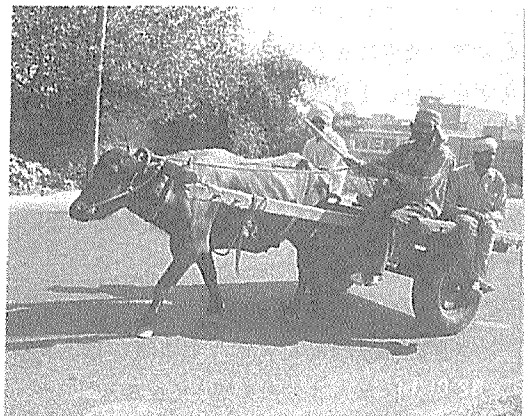


写真8. 牛車

どうしているのかということである。これもインド人の先生によると原則として殺してはいけない牛は白い在来種であって、バッファローやヨーロッパ産の牛、交雑種は殺しても良いのだと聞いて納得した。尚、シーク教徒は肉を食べても良いそうで、道理で立派な体格をしていた。また自動車事故で牛をひき殺してしまったらどうなるか心配であったが、その場合は問題にならないそうである。

拝火教（ゾロアスター教）は鳥葬だという。その現場に異教徒は立ち入ることが許されていない。ムンバイで宿泊したところのすぐそばの深い森の中に「沈黙の塔」という鳥葬の場所があるということであった。後日、博物館でその模型を見た。かなり巨大な円筒形の壁に囲まれた場所で中央に穴があり、そこに骨が集められていた。拝火教の人はファーシーと呼ばれ、約3,000年前ペルシャからイスラム教徒の迫害を受けて移住してきた人たちで、現在その人口がどんどん減っているそうである。

言語と文字

インドには様々な言語があり、ヒンズー語など主なものでも15種にもなる。1956年に使用している言語別に現在の州が編成されたので、現在25の州と7つの政府直轄領があるが、州ごとに言葉が違い、民族、文化も異なる。それぞれに独特の文字がある。看板などで見かけるのはヒンズー文字だという。言葉も多数あるので一人でせいぜい4種類ぐらいしか話せず、同じ国の人とおしても言葉が通じないこともあるようである。知識階級では英語が通じるが、ホテルのドアマンやドライバーなどで英語の話せない人も多数いた。

金銭問題

インドの通貨はルピーで、1ルピーは3.5円であった。日本人はお金を持っていると見られ、いかにしてお金を巻き上げようかと虎視眈々と



写真9. サル回し

狙っている。観光地では猿回し（写真9）や蛇使いがしつこく見てくれといい、見物料や写真撮影のお金をせびる。ある土産店で8,000ルピーのマットを、交渉の末ようやく7,000ルピーにまげさせた。良かったとほっとしていると間髪を入れず1,000ルピーのスカーフを2,000ルピーで売り付けられ、結局どちらも元の値で買わされたことになってしまった。

タクシーも慣れないと法外な値を吹っかけられる。予めインド人やそこに住んでいる人から標準の値段を聞いておいて乗らないと損をする。また勝手にあちこち案内してお金を要求することもある。

ムンバイ

空から見ると美しい半島で、着陸寸前に空港の周りに広大な貧民窟が見えた。ムンバイは人



写真10. ムンバイ

口1,200万人で、想像していたよりはるかに大きな国際都市であった(写真10)。ムンバイのオフィスの家賃は東京、ニューヨークをしのぎ世界一であるという。ムンバイはアラビア海に面した7つの島からなる半島状の土地にある街である。イギリス統治下ではボンベイといわれていたが、2年程前から元の地名にもどされた。従って町並みはロンドンを思わせる所があり、古い立派な建物や近代的な高層ビルが林立していた。海岸線は「女王のネックレス」と呼ばれ、まるでリゾート地のようにであった。これは17世紀初頭、すでに東方に進出していたポルトガルがこの島の7つの島を婚礼の持参品としてイギリス王に贈与したことによる。現在はインドの商業の中心地でもあり世界との取引量はインド全体の50%を占める。ムンバイには大企業の支店が進出し、そこでビジネスマンが活発に働いていた。ムンバイはこれほど重要な都市であるのに、日本の認識は低いと感じた。ムンバイは軍港と貿易港でもあり湾内には多くの船が停車していた。タクシーの窓から見える広場ではたくさんの少年や大人達がクリケットを楽しんでいた。

ムンバイには様々な歴史があり、マハトマー・ガンジー(写真11)が独立運動を展開したのもここであった。マニ・ババンというガンジーの記念館にはガンジーの一生をジオラマで再現し



写真11. ガンジー像(ニューデリーにて)

てあり、非常に良く分かった。彼は1869年グジャラート地方に生まれ、ここはムンバイでの住居跡である。2階には彼の使用した「紡ぎ車」も置いてあった。

帰りの飛行機で

ムンバイからニューデリーを経由して日本に向かった。飛行機からデリーの街を見下ろすと街はスモッグで被われていた。これはインドには排ガス規制がないためで、自動車からの排気ガスによるスモッグであろう。インドの朝日と夕日は赤くて美しかったが、これはスモッグのベールを通して見るから赤くきれいに見えるのだと悟った。

深夜に何気なく窓を開けてみた。すると何とも言われぬ美しい星空である。ほんやり眺めていると流れ星が一つさっと斜めに走った。オヤと思ったが、また一つ流れた。10分ぐらいで10個以上数えることが出来た。帰国してから分かったことであるが、あれが獅子座流星群あったのだ。何10年に1度しか見れないものが、しかも成層圏で見れたというのはなんと幸運なことであろう。

インドは多次元の世界である。貧富の差が非常に大きい。日本の生活指数を30~100と仮定すると、インドは3~1,000もの差がある。またインドには無数に区分された世襲による階層がある。その内部でその分を守ることによって生活が保証されている面もある。それぞれの階層の人は他の階層には踏み込まない。それぞれの階層で生活を平穩に行っている。しかし旅行者はどの階層にも入っていく。だから、混乱が起こるのだと思う。旅行者にはインドの魅力に付かれる人と、もういやだという人がいるという。さて私はどちらだろうか？